朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解（三）

駁逆の明治維新　―侵畧海軍ことはじめ―

北島平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論文第一号

第一章　オランダ伝法咸臨丸
日本と富国強兵策
オランダ風説書
長崎海軍伝習所
海舟勝安房守
兵庫海軍操練所
徳川慶喜
日本通商使節団の派米と咸臨丸

第二章　オランダ世界政戦畧
オランダの科学
オランダ近代史
オランダの商業、交易

オランダ東印度会社（Generale Nederlandische Geoctroyeerde Oost-Indische Compagnie.）の設立
オランダ東印度会社の活躍
オランダ西印度会社（Nederlandische Westindische Compagnie）
第三章　日本とオランダと長崎
オランダの日本来航
出島のオランダ館
舎密（せいみ）、窮理、電気、銅版画
オランダの器材
オランダの科学と近代資本主義
幕府の守旧策とオランダ通詞、銭五取り潰し
むすび

第一章　オランダ伝法咸臨丸

日本と富国強兵策

明治維新で日本政府が行おうとした事は、開国富国強兵策であった。この事は明治期の歴史が如実に示している。

しかし幕末の徳川政府が行おうとした事もまた同様の開国富国強兵策であった。そこに齟齬はない。ただ徳川政権を倒して明治政府に移行することが大事件であってその為に当然種々のクーデターが起り、テロリズムが跳梁した。そのイデオロギーとなったものが、尊皇攘夷論であった。これはまたスローガンともなり、尊皇攘夷が絶体の真理となり、この名の下にあらゆる行動、行為が正当化され、また是認された。それはフランス革命に於ける「自由」の名の下にあらゆる行動、蛮行が正当化され、是認されたのと楔を一にすると言われる。

この富国強兵策のよってきたるところは、日本の開国が日本主動で行はれず、西欧勢力の東漸の結果行はれたことをまずその第一の原因とする。日本はこれらから国防の危機を如実に感じ、それへの打ち返しを至上命令とするに至った。そして明治政府に於て、国家の近代化、資本主義化とその為の侵畧植民地主義の実行がついでこの政策の推進力となった。日本の開国は右の意味合いに於て全く受動的なものであった。これは極東の諸国朝韓中に於いても全く同様であった。極東の諸国はすべて鎖国しており、西欧勢力はこれらをうって開国さすことを目的として極東の地に侵出してきた。これらの西欧勢力は地獄の劫火となってまず中国を焼きつくした。阿片戦争、そして英仏連合軍の中国侵畧、（英仏連軍北侵）太平天国の乱等の勃発。これらは一六世紀からはじまった近世世界植民地化の外延として生起した。日本は明治維新となってこれら西欧勢力にかわり、朝韓中侵畧国となって暴威をほしいままにする。（拙著、近代外交史その他参照）。尚ペリー提督が四隻の黒船をひきいて江戸にやってきた年の一八五三年一〇月にはクリミア戦争が勃発している。

オランダ風説書

こうしたニュースは鎖国中の日本にオランダから伝はった。もとより早くに北方、南方から西欧の風聞はきかれたが、それは微々たるもので、オランダからのニュースは、「オランダ風説書」として公式につづけて日本に伝はることとなった。日本と西欧のかかはりあいは一六世紀後半からはじまる。信長は所謂南蛮人の来往を歓迎したが、秀吉はこれを嫌い、耶蘇教厳禁の方針を定め一五八七（天正一五）年これを布告した。家康は貿易とキリスト教を区別し、貿易は盛んにしたい意向で、一六〇三（慶長八）年正月にはルソン来聘、カンボジャに書を與う等の擧に出ている。またオランダに通商を許したのは一六〇九（慶長一四）年七月で、一六一三（慶長一八）年九月、一六一六（元和二）年八月には夫々英船に通商を許している。家康はしかしこの四月に薨じている。そして耶蘇教は追々日本から厳重に疎外されることになる。日本と耶蘇教の交流は少年遣欧使節団がその最高潮を記録する。一五八二（天正一〇）年一月[1]、家光が耶蘇教を厳禁し、内外人の日本出入国を禁止するのは一六三八（寛永一五）年九月のこと以来となるがそれは、その前年に起った島原の乱が激しい内戦となり、板倉重昌がそこに戦死する等の大変事が起った為であった。（家光の鎖国令は一六三四（寛永一一）年五月耶蘇教と奉書船以外渡航禁止の高札を長崎に建てたことからはじまる。是年出島が築かれた）。

極東各国の鎖国策は、キリスト教をそこから疎外することを問題の中心とするが、キリスト教は、一神教として曖昧模糊たる多神教を世の中に存在さすことが出来ないという宗教事情があり、多神教である日本神道や仏教はキリスト教的宗教世界観からその存在が絶対的に否定・忌避されなければならなかったのである。（近代外交史三つの視点

への試論（二）宗教改革―一神教とローマ・日本の神々―、大阪経済法科大学法学論集三十一号。朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解、―織田政権と神仏基三教、徳川政権と神仏基三教、同法学論集三十八号。）キリスト教の神仏二教に対する攻撃からそれと特に仏教との激突となり、キリスト教は最后、徳川政権によって疎外され、それが明治まで続くこととなる。

長崎海軍伝習所

幕府はペリー提督が軍艦四隻を引いて浦賀にやってきたとき周章狼狽して俄かに関ヶ原以来の祖法を変じ、この事を京都（朝廷）に奏聞してその意見を聴し、また在府諸侯を集めてペリーが提出した国書についてその意見を求めた。これ二百数十年来かつてなかったことで、これが徳川氏滅亡の直接原因となった。[2]（幕府衰亡論・福地（桜痴）源一郎、東洋文庫84、平凡社、昭和四二年）。しかし幕府は一方この事を奇貨として遠見を持し、海防の必要を痛感して海軍の建設にとりかかった。この期に及んだ泥縄式であると批判されるとしてもまたやむを得ないものがあった。これが長崎海軍伝習所（一八五五）、築地軍艦教授所（一八五七）、兵庫海軍操練所（一八六三）等の開設となる。これと共に軍艦建造、修理の事も海軍建設には絶対必要条件であるから一八六四年に長崎飽の浦に修理工場が、翌年には横浜に製鉄所・造船修理工場が建設された。とにもかくにも歴史的に日本辺海に外国船の種々出没する中で堅持されてきた徳川鎖国政策も一旦変更を決断するや、直ちにこれら海軍施設の開設に踏切ったのは、幕末幕府人なしといえども尚かかる素早い適応をあえてする余力をそれが有していたとみなければならない。ここで幕府は明確に開国富国

強兵策に転じたのであった。もし幕府の威令地に墜ちず、勢威、享保明和の治に比すべきものがありとすれば、幕府開国への転回はよりスムーズに行はれ、少なくとも生麦事件、薩英戦争、四国艦隊長州砲撃等のことは無かったであろう。それらはみな尊皇攘夷から結果したことであり、その大もとは倒幕運動にあったからである。

日本が近代海軍建設の洗礼を受けたのは、この長崎海軍伝習所がそれであったが、ペリー提督が日本にやってきた翌一八五四（元治元）年八月にオランダ船スームビング号（Soembing）が長崎に入港、このとき艦長のファビユス中佐が幕府の旗本の子弟を集めて三カ月間海軍の初歩的知識を授けた。これは長崎オランダ商館長ドンケル・クルチウス（Donkel Curtius）が幕府に海軍の重要性と近代海軍創設の必要性を熱心にといた為実現したことであった。これが伝習所のはじめである。海軍伝習所は、幕臣のみではなく、全国諸藩から俊秀をつのり佐賀藩、福岡藩、薩摩藩、長州藩、津藩、福山藩、掛川藩等から人材を選抜してここに集め、その数二百名にも達したという。

海舟勝安房守

ここで海舟勝麟太郎義邦の登場となる。この人物は江戸城を官軍が攻略に向ったとき、その無血開城を大総督府参謀西郷隆盛（大島吉之助）と談判して達成したことであまりにも有名であり、流血と破壊から江戸市民を救ったのであるけれど、この人は非常の際のぬきさしならぬ危機を一髪の間に転回する胆力と辯説の才を有していた。即ち一八六四（元治元）年二月、英米仏蘭四国艦隊の下関砲撃をとめる調停役として長崎に派遣され英蘭の海将と交渉して攻撃猶予をかちとった（この功により将軍家茂直々の沙汰によって作事奉行格二〇〇〇石、従五位下（朝廷より）、諸

大夫を命ぜられ、更に軍艦奉行に昇格、安房守となった）。また同年八月幕府の長州征伐のときも調停役として派遣され、巖島に於て長州の広沢兵助、井上聞多らと交渉、徹底抗戦を主張する広沢を世界の大勢、国家の将来を説いて説得、平和的談判開始に導いている。こうした功績を上げる勝海舟であったが、その号の示すとおり軍艦操練と海軍建設に生涯をささげた。一八五五（安政二）年にはオランダ王の好意によりスームビング号が幕府に寄贈され、海舟はこの船の運用・伝習に従事し、このとき開かれたこの海軍伝習所に生徒監として入所している。この伝習所は若き日の後の海軍大将川村純義以下有為の人物が出た（海軍中将・子爵赤松大三郎則良、初代海軍軍令部長中牟田倉之助、大阪商工会議所初代会頭五代才助友厚、日本赤十字社創立者佐野常民、そして変り種として函館で幕府最后の抵抗を行い、後海軍卿となる榎本釜次郎武揚等）。勝海舟自身、幕臣であり乍ら維新の大業完成の為、幕府の平和的解体に奔走し、また明治政府に仕えて外務大丞、兵部大丞、海軍卿、元老議官、枢密顧問、貴族院議員等を歴任し、正二位、勲一等、伯爵に叙せられているが、こうして幕府設立の軍事機構からそのまま明治政府の高官となっていることは、幕末幕府の政策と明治政府の政策が少くとも海軍と開国策に於て間然するところなかった證據であり、この意味で幕末幕府の政策が明治政府によって実行されたとしなければならない。ちなみに言えば、築地海軍教授所がその場所のまま明治海軍操練所となり、海軍兵学校となるのである。日本の開国は、西力東漸の結果引起されたものであり、更にまた地球を一つにつなぐという世界の大勢はとどむべきものではなく、日本鎖国より開国への転換は、この部面に於ては、みられる如く極くスムーズに行はれたのであった。問題は、幕府と明治政権がとってかはるということで争乱が起ったが、米国統一時の内乱（所謂南北戦争一八六一―六四年）、ドイツ統一戦争（デンマーク戦争、普墺、普仏戦争、一八六四―一八七一年）、イタリア独立戦争（伊墺戦争、一八五九―一八六一年）等の何れをとって比較し

ても、維新戦争（長州征伐、鳥羽伏見の戦い、上野彰義隊、東北戦争、函館戦争）とは比較にならぬ程激しくまた年数を経、人命、物資の消耗も甚だしかった。日本政変はこの点スムーズに行はれたと言え、この余力をもって明治政府は一気の近代資本主義化を達成し、侵畧植民地主義を国是として富国強兵策にふけるのである。[3]

兵庫海軍操練所

長崎伝習所は一八五九年までつづいたがこの年一一月にその伝習中止が命令された。これは勝海舟が米国派遣を命ぜられた事と関係があった。そこでその練習生の一部が江戸の築地海軍教授所に移された。

勝海舟は米国から帰朝した（一八六〇年五月七日）后、軍艦奉行並に昇せられ千石取となったが、将軍家茂に供奉して一八六三年紀淡海峡海防巡覧の諸船を指揮した。その際勝海舟は直々将軍に海軍の重要性をとき、兵庫にも海軍操練所を開設することを懇願したが、家茂は即答してその願いをききとどけたという。世は家茂を徳川慶喜と比し若年未熟と評するのが一般であるが、彼幼折して大事をなすに至らなかったことを惜しみこそすれ、その器量の程は、彼こそ幕末動乱期の将軍にふさわしい人物ではなかったのかと、この一事を以てしても推しはかられる。将軍宣下にあたり、年少利発の慶福を選んだ幕閣には未だ具眼の士は絶えておらなかったといはねばならない。慶喜は水戸家の出であり、水戸藩こそは、代々尊皇の家柄で、水戸光圀の手がけた大日本史は、皇室の伝統をたずねた正当性のあかしで、徳川氏の上に天皇家のあることを強調したものであるが、その水戸藩の実態は、将軍家親藩御三家としての家格の高さをこそ誇った反面、その中では最も冷遇の立場で禄高も他の二家の半分位であり（徳川義直五二九、五〇〇

石（慶長一九年）、徳川頼宣五〇万石、徳川頼房二五万石。）また慶喜までは右様次第で一人も将軍職についていないという現状で、常に水戸藩は徳川宗家に対し、不満を蔵していて、これを制肘する為に天皇家の存在を強調していた状況もあり、更に慶喜の実父水戸斉昭は尊皇攘夷の旗頭として多くの勤皇の志士・藩士がその周りに集まるといった存在であることからも、幕閣としては一三代家定のあと慶喜を将軍に迎えることは論外の沙汰であった。

さて兵庫海軍操練所は幕命によって一八六三（文久三）年の四月に設立ということになり、このとき同時に造船所の開設もはからはれた。幕府の海軍建設への意欲の大なるをここにみるべきである。ここからは坂本龍馬以下が出ている。鹿児島藩の後の元帥・伯爵伊東四郎祐亨、紀州藩の後の外相・伯爵陸奥宗光（伊達陽之助）。そして生徒も矢張り二百名程が集められたが、ここは勝海舟の私塾の様な状態となり、尊皇開国の梁山泊の様な観を呈するに至ったので幕府の忌避にふれ、一八六四（元治元）年一一月一〇日、勝は軍艦奉行を罷免されるという事態に立至り、兵庫海軍操練所も閉鎖されてしまった（勝の復職は、一八六六（慶応二）年五月二八日、軍艦奉行）。これは操練所に開設金三千両が下賜されたが、その規模上これではとうてい足りないので、坂本龍馬が奔走して金策に当ったという様な事情もあり、官立の私塾というおもしろくない様なかたちになったという事情もあったらしい。

将軍家定、家茂の時代には、みた如く外勢の日本進出を受けて海防の必要を痛感し、海軍立国の計をたててこれを実行したのであるが、これが慶喜の時代となって中断してしまう。しかしその海防、海軍の建設は明治時代にそのまま受つがれてゆく。そして明治はこのとき国是を侵畧的植民地主義の実行に定めることとなるが、徳川海軍立国の方は、もしそのまま続けばその外交は如何なっていたであろうか。これは問題であるが、少くともその推進実行方の勝海舟に於ては、近隣諸国植民地化の意図はなかったと断じて可なりである。即ち勝は兵庫海軍操練所開設時、摂海防

備、内海警備に関連して朝韓中日の合縦連衡策を主張しているし、また朝韓に海軍操練所開設の必要性をも論じている。（一八六三（文久三）年四・五月の頃）。世界の大勢に平和裡に対処することをすすめていると解される。これは勝海舟が若年、蘭学の修業にはげみ永井青崖を師として強烈な勉強をして、これを通じ世界の現実に眼を開いていたこともあり、また咸臨丸で日本人操縦の舟ではじめて太平洋を渡り、米国に使いして、その地の驚異的な文物にふれ、また陸海軍施設、政治、行政、経済機構や施設を見学して国際人としての面目を有していたことと大いに関係があるところである。こうして少くとも勝海舟は侵畧的独善主義とはなり得なかったと考え得られる。（ちなみに言えば勝海舟の蘭学勉学はものすごい激しいもので、二五才から二七才にかけて日蘭語辞典ヅーフ・ハルマ五八巻と兵書ソルダート・スコール八冊を筆墨で夫々一年と半年かけて筆写したが、そのときは日に三時間しか眠れず晝間は島田虎之助門での代稽古（勝は同門の免許皆伝）と蘭学手ほどきの教授に費やして口腔をのりしていたという。これが彼の国際人としての眼を養い、将来勉学の基礎を培ったことは疑いない。）

勝海舟は、明日の日本政治について一八六四（元治元）年九月に次の様な意見を開陳している。これは、西郷隆盛（大島吉之助）が幕府末期の内部情勢をさぐる為勝に会見したときの意見で、両人はこのときが初見でありこの会見で双方相手の人物の優にして雄なるを認めるに至った、といういはくつきのものである。これが江戸城無血開城の伏線ともなったかとも考えられる。このとき大島側は他に二名が参加していたが、西郷言うに「今、天下危急日々相迫（セマリ）、一人も実意邦家に尽す者なし。上下大抵私営小節、又嫌忌を避くる而已（ノミ）。如斯（カクノゴトク）にて、如何ぞ瓦解せざらん哉（ヤ）」、と。これに対して勝は「幕府はもうだめなのだから、賢明な藩主四、五人を代表とする諸藩会議による共和政治をやる以外に、国は立ちゆかぬ。これをもって異国に対し、毅然とした態度で条約を結べばいい」、といった趣旨を申しのべた

という。アメリカをみてきた勝海舟には矢張り共和政治という考え方が根ざしていたのであろうか。ちなみに勝海舟と慶喜との間には海軍に関し何らの接触はなかった。それは慶喜が諸外国への兵庫開港の事について勅許を得る様はからっているが、彼自身日本の海洋も海軍も何ら頭になかった為、その道の専門家であった勝海舟のそれなど注意しなかった結果であろう。勝海舟は明治三年七月一八日に外務大丞を拝命しているが、直ちにこれに辞表を提出、結局八月一三日依願免職となっている。勝の幕府はもう駄目なのだからという考えは、慶喜将軍となっても何らかはらなかったのであろう。

徳川慶喜

徳川慶喜は、将軍宣下が一八六六（慶応二）年一二月で政権返上奏請が翌年一〇月、王政復古の諭告が同一二月であるから実質一年間の将軍職であったに過ぎなかった。それが日本では大へん有名で且人気も高いのは、彼が関ヶ原以来二百七〇年間の徳川政権をアッサリ返上してしまった明治政権の大恩人であるからである。[14] この為徳川家は公爵家となって明治政権の華族に列することになる。それは丁度昭和天皇が一九四五年八月に自ら終戦を受諾して太平の基を開き、米国と共調して将来をはからったのと同日の談となる。慶喜はしかし徳川政権の幕引きをつとめるという明確な自己の役割と責任についての認識はなかった。それかあらぬか、大政奉還后の人心と徳川家士の動揺を静める為一八六八（明治元）年一月上洛したが、徳川家士激徒の為にこれもアッサリと心情を逆転され、或いはしかりとして自らもその計画を抱懐していたのか、すでにはじまりかけていた鳥羽・伏見の戦いを討薩の義戦として認め、討薩

の表を天皇にたてまつってその自己の立場をつらぬかんとした。[5] そして敗戦、徳川方大混乱の中に慶喜は江戸へ逃げかえり、あはや死罪にも問はれかねまじき情勢を招いたのであった。まことに由々しきことで、慶喜の無策、無定見、無責任は徳川方にとっては比するに人なく、責めるに言葉なし、という状態ででもあろうか。しかし明治政権の開明策で、慶喜は公爵、従一位、勲一等旭日桐花大綬章という位人臣を極めて生涯を終っている（七七才）。日米通商条約批准書交換の為の幕府の遣米使節団の一行に慶喜がもし加わっていたら彼の将軍職も大いに異なったものとなっていたであろう。時に一八六〇（万延元）年一月で、彼二三才であったが、こんな事は望むべくも無く、彼は父斉昭に従う攘夷派で、このときには井伊大老の為に謹慎中であり、同三月三日には、水戸藩浪士は大老を桜田門外で刺殺するという驚天動地の大事件が突発している。何れにしても一五代将軍徳川慶喜は幕末人無き幕閣で特に才胆共に言うべきこともない平凡な人物に過ぎなかったと評すべきであろう。[6]

日本通商使節団の派米と咸臨丸

幕府の開国策は、先にふれた一八六〇年一月二二日、日米通商條約の批准書交換の為それが派米した使節団が大きな山であった。これが正使外国奉行兼神奈川奉行新見豊前守正興、副使函館奉行村垣淡路守範正、目付小栗豊後守忠順以下七七名であった。一行は紋付、袴で渡米し、批准書交換に当っては烏帽子、直垂姿でこれに臨んだ。彼等はサンフランシスコに到着、ワシントンに到った。（サンフランシスコ三月九日着。そこから船でパナマ着。また米軍艦でパナマからワシントンへ向った。一、万延元年正月正使新見豊前守正興副使村垣淡路守範正目付小栗豊後守忠順等

は随員七十四人ト共ニ米艦「ポウハタン号」ニ搭乗、布哇、桑港ヲ経テ加州沿岸ヲ南下、巴那摩地峡ヲ横断シテ順路華盛頓ニ入府、国書奉呈、本書交換ノ重任遂行シ、費府、新紐其他ノ大都市ヲ歴訪シテ米艦「ナイヤガラ号」ニ搭シ、大西洋ヲ横断航シテ亜弗利加、呱哇、香港ニ寄港、同年十月世界ヲ一周シテ品川湾頭ニ帰着セリ。二、遣米使節ハ安政四年十二月幕府ノ全権下田奉行井上清直目付岩瀬忠震ガ米国公使「ハリス」ト折衝審議シテ締結シタル日米通商條約ノ定ムル所ニ随ヒ條約本書交換ノ為メ派遣セラレタル特派使節ナリ　日本史籍協会叢書、遣外使節日記纂輯第一。）一行は米国で大歓迎を受けた。（ニューヨークのブロードウエイの行進には通りに日米両国旗を無数にかかげ、多数の市民がまた旗をふって迎え、軍隊の閲兵、メトロポリタンホテルでの大舞踏会等が使節団の為に行なはれた。批准書は「むつびののりをさだめて、ものうりかふべきちぎりのしるしふみ」と名付けられて、人の乗る様な大きな籠に入れて運ばれ、ブロードウエイではそれは、祭礼のおみこしの様に飾られ馬車で運ばれた。）ワシントンではブキャナン大統領（James Buchanan, 15th President of the U.S.A.）の謁見が行なはれ、大統領は自身の肖像入りの懐中時計を家茂への土産に託したという。批准書交換は同年四月に行なはれたが、この使節団渡米中に井伊大老暗殺が起り、以后幕末政情はものの急坂をころげおちる様に波乱に向って転回してゆく。

このとき勝海舟は咸臨丸をかつて新見使節団にすこし先だち渡米している。この咸臨丸というのはオランダ船ヤッパン号で、これは幕府の対蘭注文第一艦であった。そして第二艦が同じくエド号でこれは朝陽丸と名付けられた。オランダはオランダ風説書をはじめ、国王の好意スームビング号の寄贈、オランダ海軍士官の幕府諸藩子弟の教育等々、多大の貢献を日本近代化や海軍建設に果してくれている。これは長崎出島の蘭館事始め以来の日蘭友好関係の上にたってオランダが日本に報いてくれた厚恩であり、日本は改めてこの好意を思いかえさねばならないであろう。義す

たれれば国亡ぶ。

咸臨丸は、艦長軍艦奉行木村摂津守喜毅芥州、船将勝海舟以下九六名であった。若き日の福沢諭吉もこれに含まれていた。当船は新見使節団の先のり護衛艦として太平洋を三七日かけてわたった。前者がアメリカ商船ポーハタン号で渡米したのにこれは、日本国籍船で、日本人ばかりで航海したという壮挙であった（但しさきに日本近海で難破した米測量船フェニモーア・クーパー号の船長以下の乗組員を護送の為乗せていたが、彼等には航海については口出しさせなかった、という）。咸臨丸は、二五〇トン、長さ一六七フィート、幅二四フィート、一〇〇馬力、木造三檣船というにすぎず、一〇〇馬力といっても蒸気をたくのは港の出入りのときだけに限られ、航海中は風をたよりに帆走するというもので、ポーハタン号は、長さ二五〇尺（約四六〇米）幅四五尺（約八四米）、頓数二四一五屯、外輪蒸気船で乗組員は、提督タットナル、船長ピアソン以下四〇〇名を数えた当時の大船であったが太平洋航海中は屢々難航を強いられたという。それで咸臨丸の方は、三七日の航海中平穏なそれは四、五日で、あとは荒波と強風に悩まされつづけたという。実に当時としては、文字通り破天荒の太平洋横断壮挙であった。咸臨丸の役目はサンフランシスコで終ったので、勝海舟はそこで造船所、製鉄所、砲台等を見学、大いに近代海軍の精髄にふれた思いであった。彼はその后南米に回航したい意向であったが、それは許されず、三月一八日一行をひきいて帰国の途に上り、五月五日無事、浦賀に到着した。咸臨丸は、帰途ハワイに立寄り、国王や国民の盛大な歓迎を受けたという。[7]

この咸臨丸の渡米はまことに近代日本と、まして日本近代海軍の発達に大きな貢献を果したことは言う迄も無く、ペリー提督の黒船来と共に明治維新史のみでなく日本史の劃期的事件であった。以后日本人で咸臨丸の名を知らぬものはないといって過言ではなかろう。幕末海軍の発達は、これらの刺激を受けて目覚ましいものがあり、幕末に於け

る黒船来への対応は意識上海辺防備の点で間然するところなかった(勿論四国艦隊砲撃や鹿児島焼討の際など実戦では役にたたなかったが、薩英戦争では薩摩海軍は英国の心膽を寒からしめた、という)。そしてそれが、そのまま明治に受けつがれ、明治近代資本主義国家の侵畧的植民地主義の中核となってゆく。幕末海軍の実勢は概畧左の如くであった。

時期	一八五四（安政元）年―一八六八（明治元）年	
船主	隻数	総数
幕府	四五隻	
諸藩	九三隻	一三八隻

将来計画

日本全国を六海軍管区に分ける。

北海、東北、東海、西北、西海、南海

船種	隻数	総数
フレガット蒸気軍艦	四五隻	
コルベット蒸気軍艦	一三五隻	
小型軍艦	一九〇隻	三七〇隻

この海軍増強計画はかくの如く遠大なものであったが、明治維新の為に幕府に於ては成就されることは無かった。しかし海軍発展は明治政府の手によって車輪に進められることは衆知のところで、早くには軍艦二〇〇隻、運送船二〇隻等という大雑把な計画もあったが、日清、日露の両役で、日本の朝鮮半島、大陸侵略が日に月に進捗をみせると共に、一九二二年には英米両国とならぶ世界三大海軍国にまで成長するのであった。この海軍結成組織は、ペリー提督の黒船来にいち早く適応した幕府の一大炯眼であった。しかしもとより日本侵略植民地主義の展開はあげて明治政府の歩みの中にその責めを求めらるべきであろう。

第二章　オランダ世界政戦略

オランダの科学

日本海軍の発足はみた如く幕末であったが、その先鞭はオランダ海軍と同士官によってつけられた。オランダは、実に一六世紀以来諸外国の日本来航からひきつづいて日本にとどまり、幕末この先蹤となったがこれは長崎に於けるオランダ人の出島居住を通じてであった。いまここにオランダの日本開国と近代科学の曙に果した歴史的貢献について考えてみたい。実にオランダは江戸期を通じてこのせまい出島のオランダ屋敷から近代科学の種々相を幕府に伝え

たのであった。それについては語学はいう迄もなく、医学、植物学、草木誌、測量学、天文学、歴算、銅吹き（製銅）、砲術、鉄砲、地理学、地誌、世界地図、オランダ史等々があった。また日本の歴史、風物、文化等も彼等の手で蘭語でつづられた。しかし鎖国下の日本であるからこれらの流出は厳禁せられた。世界情勢はオランダから先述の「オランダ風説書」という体裁で幕府に伝えられた。四面環海の日本では、松前にはロシヤから、鹿児島には英国から、琉球には李王朝からという風に種々ニュースがもたらされていたというが、規模からいって「オランダ風説書」がこれらのうち抜群であった。

織田信長は日本に渡航してきた西欧諸国のキリスト教宣教師から種々の近代科学的知識の洗礼を受けたが、その伝統は、長崎出島を通じて脈々と受けつがれ発展させられていった。コペルニクスの所謂「天動説」も正確な科学的知識の範疇で、オランダ人から日本のオランダ通詞に伝えられ幕府に知られていた。この江戸時代近代科学の源であったオランダ人とその居住地出島を日本の資料もしくは日本に伝はったそれらによって再現を試みる。[8]尚結論めいたことを先に言えば、ペリー提督が浦賀に来航したとき、江戸人士や庶民のおどろきは、高名な川柳「蒸気船たった四杯で夜も眠られず」という位大きかったが、これらオランダ伝来近代科学の知識が江戸時代にあったのなら、そう極端に驚愕することもなかったろうに、とも考えられるかと思えるが、それは（1）江戸時代に行はれた近代科学は自然科学、数学が専らで先にふれた如き科目のみであり、社会科学の政治、経済、法律、文化といった経国の科学ではなかった為、鎖国が厳しく守られ得た半面、ローマ史やスパルタカス団（Spartacus）ロシアのプガチョフ（Emelian Pugachev,1726-75）ステンカ・ラージンといったストーリーや、フランス革命史、米国独立史等々といった類いのものは全くといっていい程入ってこなかった。更に一七九〇（寛政二）年には改めて「異学の禁」が行はれている。（2）

この「異学の禁」は浮世絵、洒落本、黄表紙といった類の風俗を攪乱する恐れありと認められたものを禁止するというのが狙いであったというが、矢張り林子平の「海国兵談」がこのとき発売禁止処分を受けている。これは一七九一年に刊行されて、翌年五月にその板木が毀損され、本人は禁錮刑となったものである。世界の大勢をといて尊皇攘夷の思想ありとされた為であった。この様に幕府の思想統制、言論圧迫はきびしく続いていたので、社会科学というと幕府要路以外はあまり手を出さなかった。いや出せなかった。勢い、世界歴史や情勢にくらくそれで幕末に黒船がやってきて人々が驚愕するという次第であった。しかし一方自然科学の吸収は力強いものがあり、天文、測量、地理、医学、砲術等はさかんに行はれた。伊能忠敬の日本全図測量（一八〇〇年四月から一八一四年まで）、間宮林蔵の樺太探検（一八〇八年四月）等が行はれ、これらは今日人口に膾炙している。後者は、ロシア黒龍江地方をも探査して樺太が島であることを立証した。幕府は追々しげくなる異国船の来航に神経をとがらし、特に蝦夷地の経略には多大の努力を傾注した。これが砲台の建設や、砲術の練磨を盛んにした理由であった。一例として一八〇八年四月には下田、浦賀付近にはじめて砲台を築いたが、同一〇年二月には陸奥白河、会津二藩に相房総海岸に砲台築造を命じている。幕末になると高島秋帆に砲術教授を許可し（一八四一年一〇月）、一八四九年一一月には下曽根金三郎に洋式大砲の鋳造を命じている。

医学の発達もみるべきものがあり、前野良澤の解体新書の翻訳が一七七一年にはじまっており、杉田玄白の「蘭学事始」は一八一五年に刊行されている。このとき欧米では一七七六年七月四日のアメリカの独立宣言があり、一八一五年はウィーン会議の真只中でナポレオン一世が二月にエルバ島を脱出したが六月にワーテルローで完敗してセント・ヘレナへ流された大事件が起っていた。シーボルトは一八二三年八月に長崎に来航している。足立長雋は西洋産科を、

宇田川榕庵は化学を鈴木春山は西洋兵制を藤井三郎は英学を村上英俊は仏学をこの頃首唱しているが、幕末となって漸く思想統制は厳しさを増し、一八四〇年五月には江戸市中賣薬看板に蘭字使用禁止のおふれが出、蘭書の翻訳は、職業者以外には取扱うを禁ずとなった（第二次世界大戦中、野球に英語を禁ずとなってセーフはよし、アウトはダメなどとなった。歴史は繰返すのである）。一八二六年一一月に高橋作左衛門が「ロシア書和解」を上り、青地林宗はこの年、「気海観瀾地学」を著したが、夫々罰を受けた。そして一八三九年一二月に蛮社の獄が起り渡辺華山、高野長英が罰せられるに至った。これが翌年の禁令となったのである。勝海舟はこの様な空気の中で蘭学に打込むのであったが、彼の評判は蘭学の為に悪く、剣術の師島田虎之介（北辰一刀流千葉周作、桃井流桃井春蔵とならぶ幕末三剣豪の一人、直真陰流）の代稽古の巡回数がその為に減じたという。日本はこうした中でペリー提督と四隻の米軍艦の洗礼を受けるのであった。[9]

オランダ近代史

オランダは日本に於てかく非常に長期にわたってこれと交流をつづけ、日本知識の窓であり、日本海軍の大もとをたてたのであるが、一八〇〇年はじめは、苦難の中にあった。即ちフランス革命後のナポレオン戦争の為に独立をうばはれ、バタビア共和国として独立を回復するのに一八三〇年までを費し、真のそれは一八四〇年に至って漸く達成するという状況であった。オランダは日本に渡来したときにはスペイン、ポルトガルを駆逐して全盛時であったが、その后みた如きことを含んで幾多の変遷をみた。いまここでオランダ国の成立と発展、衰退のあとを辿るのは、決し

て無駄なことではないであろう。

当時オランダは現在のオランダ、ベルギー、北部フランスの一部を含む北海沿岸の低地帯を本土としたが、最初一七州にわかれ、それらが、都市の勃興と共に一四世紀頃より夫々の封建領主に名目的に属しながら、実質上は独立の共和国となった。一四七七年以降フランスのルイ一一世（The House of Valois,1461-83）はここに侵攻し、これを支配するに至った。后、ブルグンヂー（The House of Burgundy）のプリンセス・マリー（Mary）がネザーランドを相続した。しかるにこのマリーは、オーストリアのマキシミリアン（Maximillian）と結婚したためネザーランドはマキシミリアンのハプスブルグ（Hapsuburg）家に従属することとなった。マキシミリアンの領土は、オーストリア、ボヘミア、ハンガリー、ネザーランド、フランシュ・コンテ、両シシリー、ミラン、スペイン、米植民地に及ぶという世界にまたがる大帝国であったが、王位はその長子カルロ五世（Charles V）にわたり（一五一九年）、その子フィリペ二世（Philip II）に譲られた（一五五八年）。これをスペイン・ハプスブルグ家と呼ぶ。領土は、スペイン、ネザーランド、フランシュ・コンテ、両シシリー、ミラン、米植民地であった。これに対しカルロ五世の弟フェルジナンド一世（Ferdinand I）もカルロ五世の弟として、（他の同胞は五人の姉妹）カルロ五世の神聖ローマ皇帝の帝号とオーストリア、ボヘミア、ハンガリーを相続した。これをオーストリア・ハプスブルグ家と呼ぶ。フィリペ二世は、自身スペインにあってネザーランドには一五五九年以降、摂政、総督を置いてこれをおさめさせたが、（一）租税を重くした事、（二）カソリック教を国教として住民に強制したこと、この為新教徒を弾圧し、特にカルビン派には強圧を加えた事、（三）総督アルバ公（Prince Alva）の時、住民に大弾圧を行いその非道は彼の在職六年間に死刑八千、財産没収三万と稱せられる程であった。これが為に亡命者一〇万を数え、この結果ネザーランドの叛逆となり、独立

運動が猖獗する事態となった。オランダ独立戦争は、スペインとの抗戦となってそれは実に八〇年間を経過する。この間オランダは北部七州と南部一〇州にわかれ、後者は后二百年にして現在のベルギー国となる。フィリペ三世（二世の息）の時、王は一旦オランダ独立軍と妥協する（一二年間の休戦条約、一六〇八年）が、独立軍の勢力は益々強力さを加え、南部カソリックさえ北部新教徒を応援する事態も生じ、最后三〇年戦争（一六一八―四八年）の結果、オランダはウエストファリア条約によって独立をかちとった。

オランダと商業、交易

オランダ人はもともと非常に商業的国民で現実的、実利的、勤勉、節倹の見本の様なそれで、その節倹は、往々吝嗇を以て評せられる程であり、北部七州が独立してオランダ国となるに及んでそのナショナリズムが漸くにして結実し、この美徳を併せもって商業、貿易に一大飛躍をとげ世界的帝国の建設となるのであった。その足跡はあまねく東南アジア、フィリッピン、中国、米国ニュー・ネザーランド（ニューヨーク）、そして日本にも及んだ。ネザーランドは本来国家としては強固な統一体ではなく、その統合はゆるく地方的というよりは、寧ろ各都市的自治体の集合といったものであったが、独立と共に右の如き発展をとげた。前述の如く、もともとネザーランド国民は商業航海の術にたけ、その本土の位置がまた北海、英仏海峡、大西洋に向って開けていた為はやくより北中南欧の貨物の集散地となり、英仏西葡（独立后）諸国とこれらを交易し、またこれらの運搬に従事していた。貨物は、藍、香料、食料品、小麦、木材、紡績材料、金属、毛織物等であった。繁栄は最初南部諸州にあり、アントワープが最大の都市で、自ら

五百隻の商船を有し、シェルデ河口には常時二千五百艘の商船が出入していたと言はれた。しかし独立戦争で南部は荒廃し、ここがスペイン領として残ることとなった為、多くの人々、就中優秀な商人、技術者が北部に移住し、彼等がオランダ国の発展に大きく寄與した。また北部は宗教に寛容主義をとり、国教の定めもなかった為、多くの宗派の人々が各地からここを彼等の「約束の地」として移住した。これらの商業、交易、宗教の自由が、オランダの発展に如何に貢献しその原動力となったかははかりしれないものがあった。発展にとって自由にまさるものはない。

オランダ東印度会社

オランダ・ナショナリズムの勃興と共にその商業貿易の発展は、海外を目ざした。従来西葡両国の世界貿易独占は法王の特許状をともなって厳重に守られてきたが、それが破られるときがきたのである。オランダ人は西葡両国の禁をさける為に北氷洋航海を以て東洋に達せんとしたが、もとよりこれは失敗した。しかるに一五八八年、西葡両国の海洋独占が破られる日が到来し、スペイン無敵艦隊が、英仏海峡に於て、英国艦隊によって撃破され、海洋に於ける覇者交代の暁鐘が鳴りひびいたのであった。オランダ、何條これを黙視すべき。彼等はきそって東洋行の断行に移った。こうして彼等は各州に於て資本を集め夫々の東洋貿易の会社をつくった。一六〇一年当時、オランダには印度貿易に従事する船隊一五、船舶総数六五隻に達していた。これらは九つの会社に分かれていた。これは、スペイン治下のオランダに於ては到底考えられないことであったが、その独立と共に一擧にかかる状況となり、彼等は印度、東南アジア、フィリッピンに於て、ポルトガル、スペインの貿易を攪乱し、彼等と抗争して自らの独立を確立するに至る

のである。これらの会社は、その内部関係に於て東洋貿易の為に激烈な競争を展開する様になり、外地、内地に於て彼等自身の利益をみずから甚だしく毀損する様になった。これが彼等の大同団結が絶対必要なりという認識を一般とし、オランダ・ナショナリズムの展開と共にここに「オランダ東印度会社」の設立をみるに至った。一六〇二年三月二九日のことであった。日本では関ヶ原戦后で、家康は早くも海外貿易の意をたて、この年八月親書をルソンにおくっている。この会社は最初は、各地方会社の自治的活動を承認していた。しかし追々と、オランダ国家との関係を密接にし、また重視することとなり、条約の締結、築城、軍隊の編成、軍事、行政、司法の夫々の官吏任免等を実施する様になり、東印度会社は、現地に於て宛然国家内国家を現出したと評されるまでになった。これらの東印度会社の活動は一七名からなる理事会によって遂行された。それはアムステルダム会社より八名、ゼーランドのそれから四名、その他夫々の会社から一名づつの五名であった（エンクホイゼン会議所、デルフト、ホールン、ロッテルダム等）。彼等は主に出帆の日時、使用すべき船舶数、東洋貿易の政策、方針等を決定した。東印度会社設立の当初は、課すべき規律は厳格なもので、これが会社の活動を活性化していた。ちなみにそれは以下の如くであった。（一）各理事は誠実潔白に行動し、株主に対して公平なることを誓う。（二）断じて会社の金子を自由にし、又は経費の一切を株主に負擔させない。（三）各会社の会計監理の全責任を負う。これらの規律は以て他山の石とすべきものである。これが厳格に守られているうちは会社の活動は繁栄し、スムーズであったが、年月と共に会社は腐敗し、互いに私利私欲にふけり規律は有名無実となってこれが会社の没落につながっていった。

オランダ東印度会社の歴史

オランダ東印度会社は、近代資本主義発展の為一九世紀半ばに世界的に勃興する強権国家主義、膨張主義、近代的植民地主義の先駆をなすものであった。その活動の目的は、印度、東南アジア諸地域、フィリッピン等に於てポルトガル、スペイン、中国、英国、フランス等の植民地活動を遮断し、その活動家をそこから駆逐することにあった。これらの征服活動の為、オランダは一六〇九年東印度総督を置いて現地オランダ人の活動を統轄するに至った。しかるに総督は現地の諸活動執行の為置かれた印度会議（九名）や、一七人会議等の権限を巧妙にかいくぐって独裁権を確立し、強大な支配力を握った。その源は彼に與へられた軍隊と軍事権であった。

オランダ植民地活動は、（一）交易によって商業的利益獲得を専一とする。（二）土地を併呑し、植民者を移住させることは二義的とする。（三）キリスト教伝道は直接目的としない（これがオランダが江戸時代を通じて永く日本にとどまった最大要因であった）、ということにあり、オランダ植民地主義には伝道者、征服者、冒険家等の主たる参加のなかったことが特徴的であった。

こうしてまず該地に強力であったポルトガル勢力の掃討がはかられ、印度マラドル海岸、コロマンデル海岸、セイロン等からこれを遂い、マラッカ海峡、モルッカ海峡間の広漠たるインドネシア各地域から同じく彼等を追い落としてこれらをオランダの勢力圏とし、ジャワのバタビヤを現地経畧の根據地（一六二一年）とした。スペインは、この形勢からその力を専ら南北アメリカ経畧にそそぐに至り、東南アジアから撤退した。フランスもいまだ力が微弱であった為、一六〇四年に設立した仏東印度会社を放棄して一六二八年以降その活動は終熄した。英国とは流石に激し

い争いをくりひろげたが、英国の世界帝国確立の力は未だ発揮されず、バンダ海上のアムボイナにオランダ人による英人虐殺を蒙ったりして（一六二三年）、その翌年英国はバタビヤを撤退した。

オランダ東印度会社が現地に於て取得し、世界に取引して巨利を博した物品は原産の香料が主で、それは丁字、肉荳蔻（ナツメグ）、胡椒、インディゴ等であった。そしてまた甘蔗、阿片等も取引の対象であった。尚オランダ人はジャワに於ける珈琲栽培を劃期的なものとした。珈琲は衆知の如くアラビアのモカが原産地であったが、これが一八世紀初頭にジャワに渡来し、オランダ人がこれに眼をつけてその栽培を行うと共にまたそれを増大させたのであった。オランダ人の商売は、現地でこれらを出来る限り廉価に買入れ、主として欧州で驚くべき高値で販売するというそれであった。物品と時期によってそれらは五〇〇倍もの利益をもたらしたとさえいはれる。物品の専売を確保し、仕入れ価格を出来るだけ引下げ販売価格を高値にする為、彼等は香料の栽培を独占し、密貿易を厳重に取締まった。香料産出の樹木の数量を制限し、この為余分と考えられたそれらを切払ってしまうのが常であった。こうして彼等は現地産業とその取引を支配独占した。

オランダはしかしこの商業と貿易以上の産業を発達さすことがなかった。彼等はもともと農漁業民であり、航海の術にすぐれていたが、工業、技術の発達には吝であった。こうして英仏両国というこの部面での後発国が膨張主義に転回し所謂産業革命を遂行して近代資本主義国家としての実力を蓄えると共にその攻撃を受けてオランダの商業植民地主義は衰退し、東南アジア帝国を彼等に明け渡すこととなるのであった。近代国家の発達はナショナリズムと共に近代資本主義の発展なくしては考えられず、成りたち得なかったのであった。

一旦はオランダの為に東南アジアへの進出の道をたたれた英仏両国であったが、一七七〇年頃より失地回復に向い、

夫々ギネア沿岸、印度洋沿岸地方に香料栽培に乗り出し、また夫々オランダに戦争をしかけてその東洋貿易の独占を奪取する擧に出た。即ち英国は一七八〇年より同八四年にかけてオランダとの戦争に従事し、フランスはフランス革命后のナポレオン戦争でオランダの独立を一旦奪うのである。このとき英国はフランスと対抗する為オランダ植民地の一部を奪って自己の據点をつくる。こうした情勢でオランダは衰退し、オランダ東印度会社も最后莫大な借財をかかえることとなって一八〇〇年に倒産の憂き目に逢着するのであった。

オランダ西印度会社

オランダは一六二一年、その東印度会社とならぶオランダ西印度会社を現在のニューヨーク（ニュー・ネザーランド、ニュー・アムステルダム）に設立した。オランダのアメリカ進出であった。その組織は東印度会社に準じ、アムステルダム、ゼーランド、ロッテルダム、フリースランド、ホルン、グローニンゲンに夫々会社を興しそこから代表を出して「一九人会議」を構成した。主動権はアムステルダムが握り、九名の代表をそこに送った。オランダの世界帝国建設の夢はこの時果しなく広がっていた。これは東印度会社と異なり、キリスト教を弘めて神の栄光をあらはすことを目的とし、また植民地を開拓して奴隷なき王道楽土を建設することをうたうものであった。宗教の自由は認められた。

ニューヨークはハドソン河にその名を残す英人ハドソンによって開拓され、鯨群がスピッツベルゲン沖に生息することが認められ、アザラシやテンの捕獲取引も盛行可能であった。しかしそれらの取引の収益は、到底東印度会社の

香料貿易のあげる利益とは比すべくもなく、西印度会社は、征服事業の面を強め、アメリカ、南米、アフリカ西岸等にポルトガル、スペインの根據地を襲い、その艦隊を撃滅してこれらの戦果から利益をあげるというコンキスタドールの途を歩みはじめることとなってゆく。そもそもが東印度会社設立に当ってもポルトガル、スペインの船舶を攻撃捕獲する命令があり、一隻の捕獲につき金いくらの報酬が約束せられていたということもあったのである。

しかしこの様な攻撃が葡西両国相手に常に一方的勝利を収めることは到底不可能で、特に当時米国南部、南米に於ける該両国の勢力地盤は固く、オランダ西印度会社は攻撃に一進一退をくりかえし、追々その存立の基盤を失うのであった。西印度会社の戦果が最も上がったのは一六二七年から同三六年に至る間で、その后はこの勢いをかってブラジル経略に乗り出しこれを一六四四年まで保持した。そしてこれを頂点として西印度会社は衰退に向い、英国の世界戦略が確立し来りその戦勢を全世界に伸長せんとするや、忽ちにしてその攻撃の矢面にさらされ、チャールス二世（Charles II,1630-85）は王弟ヨーク公（Prince York）と軍艦四隻をここに派遣した為オランダはこの戦いに一敗地にまみれ、結果西印度会社の全植民地をこれに奪はれることとなった。ここにニューヨークの名おこる。ときに会社は内部的腐敗の極にあり、英国の攻撃に反撃らしき反撃も無きまま、その軍門に下ったという（一六六四年）。（Precious Metals and Commerce, the Dutch East India Company in the Indian Ocean trade, edit. by Om Prakash, Variorum, 1994. Holland, the History of the Netherlands by T.C. Grattan, P.F.Collier, 1899. The Making of Modern Holland, by A.J. Barnouw, 1944. Holland on the Hudson, an economic and social history of Dutch New York by Oliver A. Rink, Cornell Univ. Press, 1986.）

植民地主義者と植民地主義者の死闘かくの如し、これらが世界史を構成していったことに果して何人が万斛の涙を

流し如何なる感懐を覚えるのであろうか。

第三章　日本とオランダと長崎

オランダの日本来航

オランダが日本に初見した頃のその国家の態様、歴史は右に記述した如きものであった。何年何月にオランダ人が日本にその初歩を印したかはもとより詳かにしないが、一六〇九（慶長四）年七月に将軍秀忠がこれに通商を許可したという記録が残っている。日本にやってきた西欧人は、矢張りポルトガル人がはじめてであった。一五四一年七月にポルトガル船が豊後の神宮寺に来着し、二年后一五四三年八月にポルトガル人が多禰島に来て鳥銃を伝えたという。鉄砲伝来の話は日本史の常識である。ポルトガル人はこれから日本に砲術をも伝えている。しかしスペインも負けていず、一五四三年にはスペイン船が平戸にやってきている。鳥銃伝来とどちらが早かったかはこれも詳にしない。（後教を待たねばならない。）いづれにしろこの頃から日本ははじめて西欧諸国と接触をもち、朝韓中以外の国々と国交を開くにいたる。そしてフランシス・ザビエーがその六年后に鹿児島にやってくる。これからキリスト教の伝来となって日本史はその事端を繁くするのである。

オランダが通商を許可されたときには前にふれた如くすでに秀吉、家康の禁教令が出ていて、貿易とキリスト教伝

播とを区別したい日本為政者の意向が明らかとなっていた。この二者とも所謂南蛮貿易には強い眷恋を示すのである。

オランダは日本にこれから種々の西欧知識を伝えるのであるけれどもそれは機械、技術、工鉱業といったものではなく、これは前にふれた如く人文科学、医業、航海術、天文、地理、測量等に関する知識とそれらの実演であった。オランダは重農主義、重商主義国家として発展したが、産業革命や近代資本主義を経過することに甚だ迂遠であった為、そういった知識、実行を欠いていて、勢い、日本にもそれら部門の伝達輸出に吝であった。これが鎖国制度下の日本の国体、政体を変革する様な制度、文物の持ち込みといった現象が起らず、その意味では朝韓中と日本の国交とさして変化のない、その部面では静謐な国交が可能であった。これキリスト教の伝達がなかったことと共にオランダが永く日本と国交を維持して幕末にまでおよぶ所以のものであった。ちなみに言えばオランダが近代資本制生産を知り乍らこの部門を日本の鎖国制の故に割愛して日本に持ちこまなかったとか、日本がこれら全般的な知識をもち乍ら鎖国制の下にオランダからそれがもちこんでくるものだけを受容していたとかいうことはあり得なかったので、この部面を研究することで、逆に当時のオランダの経済発展段階を推測するよすがとなり得ようと考えられる。

出島のオランダ館

オランダ人は爾来九州に渡航してきて該所で貿易に従事するのであるが、一六二一年には平戸にオランダ館が置かれた。そして一六二七年九月にはオランダ国王、フレデリック（Frederick Henry）の修好貿易の為の親書が幕府に

呈されている。オランダはこうしてよりより日本との通交を深めてゆくが、三代将軍家光の代に至って徳川幕府は鎖国政策に踏み切って一六三四年五月には耶蘇教、その他奉書船以外の船舶の渡来禁止の高札を長崎にたて、同地に出島を築造してポルトガル人を主としてそこに移した。古来より通交のあった朝韓中の人々はまだ自由に往来していた。唐人館が長崎につくられるのは、年代がづっとあとの一六八九年、元禄二年四月のことであった。鎖国令は追々きびしくなり、島原の乱（一六三七・一〇―一六三八・二）をはさんで一六三九（寛永一六）年七月には外国貿易禁止の制をたて、蘭人、中国人のみ通商を許す、となった。翌年六月には媽港人六一名をこの禁令を犯したとして斬に処すという荒々しい行政の発展となって人々を恐れさせた。そして長崎出島からポルトガル人その他外国人を追放することとなり（一六四一（寛永一八）年二月）、そのあとへ和蘭人を平戸から移すこととなった。ここにオランダ人と長崎出島が結びついて、以来その関係は幕末まで継続し、出島と西洋、カピタンと三本マストの阿蘭陀船は人々の究理の念とロマンの対象となった。（从长崎貿易看江戸時代清日西国的経済・文化交流・华立）

出島は四千坪という比較的狭い屋敷町となり、ここへ大小三、四〇棟の家屋がたてられたが、家屋の下は概ね倉庫となっていて、階上が住居であった。住環境は快適なものではなく、出島の牢獄という言葉が用いられ、阿蘭陀趣味とオランダ土産に描かれた飲食の図とか、長崎丸山の遊女の出入りとかお花畑とかは現実離れしたものであった、という。食事もこれらの図に描かれた豪奢なものは年に一、二回の記念日とか、祭日の為のものだという。クリスマスは祝はれずフラートハルコ、ラーグーという祝宴があったという。商館長以下館員は単身赴任で、家族は帯同を許されず、たまたま夫のもとにきた妻と娘、幼児（ヤン・コック・ブロンホフ（J. Cock Blomhoff）商館長の家族、一八一七年七月着任）は三ヶ月の后に送還されて人々のあはれを誘ったという。この三人と乳母は二、三種類の版画に

描かれて流布され、珍しい阿蘭陀婦人の図として珍重された。女手がないので丸山の遊女が家事の必要をみたすために出入していたが、商館員に対する監視はきびしく日本人のオランダ通詞という人々が、多いときには二百名以上いて、これらは商館員の一々の監視委員であったという。出島は長崎湾の山側のはしに設けられ、本土とは短い橋一つでつながっていた。そのすぐの対岸には長崎西奉行所があって西警察署の様な役割を果していた。しかし東南アジアや西欧から人々がオランダ人と稱して入りこむことも絶無ではなかったらしい。

舎密、窮理、電気、銅版画

江戸時代の科学の発達はオランダの貢献として先にふれたが、その他舎密（セミ）（化学）、窮理（キュウリ）（物理）、電気学、銅版画、繊維、ガラス製造、そして幕末になるに従い写真、製鉄、鉄砲、造船、火薬の製法、樟脳、氷砂糖、アルコール製法等の技術も発達した。これらは矢張りオランダを通して出島から入ってきたが、ポルトガル、スペイン等から鎖国以前に直接入ってきたものも多くあった。

これらの中オランダ伝来の具体的な器物をあげると、天地二球用法記（地動説、天動説の解説）、地球儀、天球儀、渾天儀、天体儀、日時計、平天儀、七曜転輪図、天体観測換算表、地球壓扁図、限象観星鏡図、経緯儀、子午儀、六分儀、彎窠羅針、コンパス各種、ラランデ天文書、顕微鏡、各種医療器具（オランダからのものは紅毛流と呼ばれ、ポルトガル、スペインからの南蛮流から発展した）、浣腸器、カテーテル、止血具、聴診器、電気治療器等であり、この他世界地図は種々のものが伝来した。

オランダ器機

右にみた様々な技術、器機等がオランダ人の手をとおして日本に流入したが、その中でも鉄砲はしばらくおくとしてその他「気砲」と名付けられた空気銃、その普及に従っての解説書などが流布された。これは銃床（圧縮した空気を入れる容器になっていて蓄気筒と呼ばれた）をはずし、生気筒、生気棍（空気ポンプ）で蓄気筒に空気を溜めて使用した。これは一八一九年―二一年（安政二年―四年）に製作されたと考えられているが、注文や問合はせが多かったという。[10]

それから一般に大いに人気のあったものにからくり人形がある。これはすでに室町時代から日本で行われオランダ人渡来以前は中国のそれらが日本に普及していたが、日蘭交流とともにオランダの技術が入り、日本独特のものもこれに加えられて大いに発達した。これは吉宗の洋書禁止令の緩和が、蘭学の興隆に資し、からくり人形の改良、発達もこれに影響されておこった、という。からくり人形には、茶運び人形とか、御所車にガラスコップを置くと唐子が軍配を振り、引き手人形が首を振って車が前進するとか、「木彫祇園會山鉾」とか種々精巧なものが造られた。時計も種々のものが作られたが、日本の時計は二四時間平分製ではなく晝夜の時間帯をかえるという二挺テンプ時計（頭に二つの挺をつけてきりかえ、時間のすすみを調節する）がつくられて西欧の時計より複雑なものとなっていた。「目覚時計」、「懐中時計」、「掛算時計」、「万年時計」等色々作られた。仕掛けものでは一八五五（安政二）年には蒸気機関車の可動模型もつくられている。その他「噴水器」また自動式に火口に菜種油を供給する「無尽燈」もつくられ、その用法記も出版された。器具、用法記二つ乍ら日用の必要便利品という事で頗る売れた。年代は江戸後期とい

う。非常に精巧な葉たばこを約０・１㎜の幅で自動的に送り出して刻む「車機関細刻器械」も作られた。[11]

こういった手作りともいうべき種々精妙な器機がオランダ通商と蘭学普及の効果として作り出されたが、その他一般的に流布されたものには、オランダ絵画、その模写、オランダ文字の図案、オランダ渡りのビロードや更紗を加工して煙草入れにはったものや、縫い合わせ下着、更紗胴掛などがつくられて珍重せられた。所謂オランダ趣味または蘭癖のたぐいである（長崎オランダ商館日記・全九巻、日蘭学会編、雄松堂、一九八九―一九九八）。

オランダの科学と近代資本主義

こういった種々の器機は、しかし乍らそれとして珍重されたのみでこれが近代産業や近代資本主義の勃興にたすけとなり、またその興隆発達に結びついたということはない。銅吹きという精銅の技術が発達し、銅を多産した日本では銅鉱を山元へ運び、そこでそれらは一旦精錬され、これら「荒銅」と呼ばれたものが更に大阪へ運ばれ、そこの「銅吹所」で不純物を除く「真吹」きが行われ、最后「小吹」きと呼ばれた技術で出来上がった精銅を溶解して「棹銅」を精製した。これこそ日本の対蘭輸出品の最重要物件であった。棹銅は一本二〇糎米あまりの細長い凸凹の銅棒であり、これを箱につめて二〇〇本一箱（箱とも一〇〇斤、六〇㎏）として輸出した。これにつきその折々の値段、数量等について日蘭間に重要な交渉が不断に行われた。これなどは産業資本主義発達の重要な一環とも考えられるが、当時は日蘭間重商主義の範囲内でこれは処理された。また幕末佐賀藩、薩摩藩に夫々一八五〇（嘉永三）年、一八五四（安政元）年、反射炉が築かれたがこれらは原料の処理や送風用水動力に難点が続出したという。

近代資本主義、産業資本の勃興には必然的に社会経済的、国家的條件がいる。近代資本主義の発達には、まず資本がいる。これを用い、原料を買い、労働力を買い、設備をととのえ生産を行い、商売をする資本家が必要である。そしてそれを許し、その発達をながめ推進する国家権力が必要である。世界的にそうである。日本のことをいうと、江戸時代は封建主義で、そういった近代資本家になる器量の頭領たる人々は、殿様になっていた。またそういった人々の子孫であった。これら殿様に近代資本家になれといってもそれは無理で出来ぬ相談であった。一八九〇年代ロシアでツアーが自ら資本家的活動を行い、種々の企業に投資し就中シベリア鉄道の建設を手がけたが、資本金不足で行詰り、外国借款にたよって財政破綻と外国支配をまねき、「我が父・ツアー」の面目をすてて民衆に背を向け、民衆の不満を醸成した挙句これを一九〇五年の大弾圧でもって踏みにじり、一九一七年二月革命の原因をつくった。ツアーの商法はこの様なものであった。革命はツアーリズム打倒と外国支配脱却がその二大眼目であった。これは中国毛沢東革命についても言える。

日本にはツアーもいなかったし近代資本家も存在しなかった。そういうところでは資本主義は発達しないし産業も発達しない。故にオランダ渡りの科学技術もそれとして近代産業にくみこまれ利用されることはなかったのである。技術が資本主義をおこすのではなく、近代資本主義が存在して技術工芸がそれに用いられるのである。そういう国家経済体制がなければ如何に優秀な技術工芸であろうとも産業に用いられる事はない。従って幕藩体制下の日本ではオランダの技術工芸が産業の発達に資することはなかったのであった。

日本の為政者は封建主義維持がその絶対命題であった。何もそれを事だててそう考えずともそうであった。その意味では鎖国政策もその為の重要な政策であった。鎖国政策が色々な部面で様々なひずみを残したことは勿論であるが、

例へばわが蘭学についても種々の影響が出て、この禁令が厳しくなったりゆるめられたり寛巌ところを得なかった。吉宗の後寛政異学の禁が出て（将軍家斎、老中松平定信、寛政二年五月、一七九〇年）朱子学のみが幕府の正統な学問とされたが、一八三九（天保一〇）年に至り将軍家慶一二月、蛮社の獄が起った。さきにもふれたがこれは蘭学者、渡辺華山、高野長英の夫々の著書「慎機論」と「夢物語」が鎖国政策を非難し、開国論をとなえたと解釈された為、二人が国法を犯すとして捕えられたものであった（閣老水野越前守、捕吏鳥井耀蔵）。前者は三河国に禁錮され、後者は自首したが終身刑として江戸伝馬町の牢獄につながれた。華山は藩主に累の及ばんことを恐れて同所に自殺し（四九才）、長英（三五才）は潔く自首したのにこの裁きと憤慨し、六年后に牢屋の火災にまぎれて逃亡、顔を薬物で焼いて諸々を流浪した。この間の物語りは、小説に、演劇に仕組まれて流布している。江戸にもどり、たまたま路上で無宿者であった牢友に声をかけられ、なつかしさから応答した為、あとをつけられて捕縛された。彼は捕吏の密偵に変身していたのであった。このとき長英は襲ってきた七人の捕手を相手に奮戦、一人を刺し、一人を傷つけた后柱に立よったまま咽喉をきって死んだ。時に一八五〇（嘉永三）年一〇月、入牢から一一年目であった。すさまじい生きざまというべきか。

幕府の守旧策とオランダ通詞、銭五取潰し

鎖国は寛政改革となってオランダ通詞達にも過酷な処遇を課した。通詞は稽古通詞、小通詞、大通詞の三段階に分けられる職掌であったが、段々きびしくなり、諸立合通詞、御用通詞、通詞目付、大通詞助、小通詞助、小通詞並、

小通詞末席、稽古通詞助等の分掌が出来た。[12] これは通詞の人数が前出百五〇名にも二百名にもなった為である。通詞の蘭訳が蘭学勃興の一つの基礎であったが、寛政二年九月から一二月の頃に「誤記」事件なるものが起って何と八名がこれに連座し、三名は入牢の上、翌年三月から「五ヶ年蟄居」となり、五名は「町預」から「伺之上五十日押込」となった。きびしい処置である。罪科は、日蘭取引の文書に商品は没収され、「焼却」されるという文言があったところこの「焼却」という二字が脱落していたというのであった。一七九〇（寛政二）年（このときフランス革命とナポレオン戦争でオランダ国は苦境にたつこととなる。）五月に長崎貿易の「御改正」が布告され、日蘭の銀銅取引が半減されることになった（銀一二五〇貫目、銅九〇万斤、船、年一―二艘を夫々七〇〇貫目、六〇万斤、一艘）この為種々折衝がなされたが、最后、オランダ側はこれをのまざるを得なくなり、その約文がきめられ、その違約の場合の罰則として前出の文書がつくられたが、そこに脱字があった為、右述の処罰となったのであった。

この様に幕府はその国家権力と社会経済体制を維持する為に守旧手段をいろいろと講じて世の変革を未発にすることをはかっていたのであった。近代資本主義への胎動などは厳しくとがめられた。この為からもオランダの科学技術が尊重されることはなかったが、例えば有名な銭屋五兵衛（加賀城下）一家の取潰し事件というのがある。取潰されたときの銭屋の財産は、目録によると金子・大判一、四八五枚をふくんで三二万二、〇六七両一合、貸付証文・二七万五三〇〇両、田地・八、五三〇石、米俵・三万五、四〇〇石、船舶・二四三艘、土蔵・七八ヶ所、現在値何千億にもなろうというものであった。これが近代資本主義社会ならば、大企業主・コングロマリット支配者として名実ともに我世の春を謳歌しつづけることになったであろうけれど、こうした早期大資本家・企業家を幕藩体制はのみこむことは出来なかった。銭屋五兵衛は米、海産物、材木、織物その他種々の物品を取引し、これを全国津々浦々に運送す

る商売であった。その出入りの港は津軽、松前、函館、兵庫、大阪、長崎等でこれらの土地に支店をもうけていた。米相場も手掛け、田地の拡張、山林の買占め等何でもやった。薩摩の海上で時々やってくる英国船との密貿易も行って白糖、麦酒、葡萄酒、ギヤマン、ビロード、ラシャ等々をひそかに手に入れていた。その最盛時には加賀藩によく金子を貸し與へ、藩も彼を後援して「加州手船宮の腰町銭屋五兵衛才許、船頭水主共九人乗り永代渡海をなすによって、津々浦々異議あるまじきもの也」という官許状を下附した。更に常豊丸・一、五三九石積み、常安丸・九六〇石積の両船に梅鉢の入った船印、幔幕、提灯をかざって権威の裏附けを行うことを許した。五兵衛本人は、苗字帯刀を許され十村役（大庄屋）の稱号を與へられた。[13] しかし幕藩体制、封建主義社会経済制度がこの先行産業資本家の活動を許す限界はそこまでであった。五兵衛は会津藩内山林の買い占めで会津藩と幕閣ににらまれ、加賀藩内河北湖の干拓事業で加賀藩からももてあまされた擧句、一八五三年四月、明確重大な罪科立証もないままに銭屋五兵衛一族は加賀藩にとらえられ、次男と手代一名の二名磔となり他は永牢其他の罪科に処せられ（銭屋五兵衛は牢死）、さしも盛大を誇った銭五商店も潰滅した。ペリー来航と同じ年であった。

幕藩封建体制は、私有財産や、私営、拡大再生産を保護維持する体制ではない。例えば日本の場合、それは将軍の下に二七〇諸藩と家臣団、農民、商工業者、庶民を統轄支配する国家権力、社会経済体制である。即ち将軍の下に大老、老中、若年寄、奏者番、寺社奉行、京都所司代、大坂城代、評定所を根本の軸とし、たてわり的にその下に百数十種類の行政機関を有する封建主義の完成された一大支配体制であった。その根本義はこの支配体制を現状維持して守り、不動のものとすること以外にはなかった。これに資本主義の発達を認め、槍一すじではない資本を以て人々を集め、利潤活動を行い、数多の人々を統轄支配する器量の人々・資本家の存在と発展を認許することなど出来ぬ相談

であった。それをする為には資本主義体制をうちたて、これを守り発展さす力、即ちその為の国家社会経済体制と国家権力が絶対必要条件であった。これらの事は、よく理解されているところで今更、ことごとしくのべたてる必要もないことであるが、この結果ここに国家権力、社会経済体制の変化の為には国家的変革、革命または国家統一運動などが生起する必要があった。旧国家権力を打倒して新国家権力を創設する為の運動、行動である。（一）これには国民議会や評議会、話し合いなどによって変革は出来ない。（二）例えば国家統一は、剣によらなければならない、といった現象が必然的となる。これらについては前拙稿に屢々論じてきた（例えば「大阪経済法科大学法学研究所紀要二五号」、「近代外交史」、創元社、等々）のでここに再説しない。また（三）近代資本主義社会となってもその資本主義化には、資本の本源的蓄積の為に近代植民地開発事業が起らなければならないと共に農業の資本主義による搾取が属性とならなければならいといった現象がまた必然的となる。例えばこの典型は、スターリンのソ連邦のソホーズ（Sovkhoz）とコルホーズ（Kolkhoz）農業であり、明治国家（明治、大正、昭和）の農業搾取であるがこれらについても前拙著に種々論じた為（近代外交史、現代外交史、共に創元社刊、北島平一郎著作集全三巻、大阪経済法科大学出版部刊等）、これらについてもここにくりかえさない。紙数の関係上ここでは、ただ封建主義から近代資本主義への国家の転換の必然性をその大すじで再説したにとどめる。そしてその中で銭屋五兵衛商店をかりてこういう全国的早期産業資本の芽生えも旧国家体制の下では、奨励督勉されるどころか、大きな歯車の下の蟷螂の様に旧国家の必要次第で声もなくふみつぶされるのであり、その憐れな実態を現実的に具体化してみたにすぎない。

そしてこういった幕藩体制下ではオランダのまたオランダを通じて入ってきた種々の所謂科学技術工芸もそれとして研究珍重されたにとどまり、これが近代資本制産業を発達させ、これにとりこまれることはなかったのであった。

それをここにみた次第であった。

むすび

さてここまで主として日本海軍の発祥、それを指導したオランダ、オランダ国の発展、その東印度会社、日蘭関係、出島の描写、オランダ伝来の科学、技術、工芸等についてそれなりに考察を加えてきた。その中でも特にここにむすびとして強調したいのは幕末海軍の発展であり、その后のその発展のみちすじである。海軍はオランダの力と好意によって早くも幕末にその発展の緒についたことをみた。これはオランダが一六〇九年以来唯一の西欧勢力として日本の長崎出島に二六〇年間も滞留し、日本と和親貿易をつづけた結果オランダの好意と指導によって海軍のことがはじまった次第であった。出島の存在もまた大きなものがあった。

そしてそれは直ちに明治維新を迎えて明治日本海軍として引継がれ発展拡大をつづけるのである。そしてそれは明治国家の富国強兵策、近代資本主義の国家的促進に従ってこれは侵畧の為の海軍に変貌をとげてゆく。その目標は勿論朝韓中の大日本帝国による支配であった。黄海海戦（日清戦争）、日本海海戦（日露戦争）で日本海軍は格段の進歩発展をとげ、世界に冠たる海軍を誇るまでになる（一九二二年二月には日本海軍は英米につぐ第三位のそれとなる）。

この様に日本海軍はオランダによる発祥、幾ばくもなく侵畧のそれとなるが、これは勿論日本が徳川時代の鎖国平和政策をかなぐり捨てて近代資本主義国家となり、資本主義の発展に不可欠の資本主義の本源的蓄積の為に膨張主義

国家となってゆくのにつられた現象であった。しかし日本はこの海外発展を膨張主義、侵畧主義に転回する経験を既にして歴史的に経過した事もまた忘れてはならない。それは日本が、日本海国家から脱皮をめざして東南アジア世界に雄飛しようとした一六世紀の海外渡航の時代に起った。即ち日本人は、博多、堺を中心としてときの豪商がマーカンチリズムの洗礼を受け、フィリッピン、東南アジア諸国にその交流を深めようとしたのであった。それはある成功をかちとるが、この豪商達は時の権力と結びつく政商達であり、彼等は独自の資本家として発展することを許されず、時の為政者と結合したのであった。そしてこの平和交流は破れて日本は直ちにその国家活動を侵畧膨張主義にかえ、またまた日本海国家としての面目を充二分に発揮して朝韓中に侵畧の歩武をすすめるのであった。

幕末、明治維新のオランダによる海軍の発展と近代国家膨張主義、その日本海侵畧国家の発展をここに跡ずけることが、明治国家の侵畧的植民地主義の解明に必要であり、その為にこの一六世紀に起った同様の経過と歴史の研究は不問に附すことは出来ない。ここに一章をあげてその歴史的経過の顛末を考究しようとするのが次の拙論の課題となる。

（1）　天正少年遣欧使節、一五八二（天正一〇）年一月二八日四少年使節長崎出帆、一五九〇（天正一八）年六月末長崎帰着、一五九一年正月京都聚楽第に於て秀吉に謁見という、実に九年に及ぶこれも当時破天荒の旅行であった。少年は一二、三才から一五才であったが、帰着時にはみな立派な青年武士となっていた。その往復の帆船旅行の困難は筆舌につくしがたいそれで、風浪の艱難、天候の異変、未知なる沿海の難航、未知なる海獣の出現等、暴風雨にみまわれたときは胃も腸もみなはき出す程の苦しみであったという。但し一五八五（天正一三）年二月二二日ローマに入って法皇グレゴリオ一三世に謁見、法皇の足にキスして法皇から夫々、額に接吻を受けるというこれも破天荒の扱いを受けた。その

ローマ入京の際の歓迎はこれも筆舌につくしがたく、二、三百名の護衛兵が一行にしたがい、出迎えの軽騎兵がトランペットを吹き鳴らすと気付いた群集がなだれをうって一行をとりまき、口々に祝福の言葉を投げかけた、という。謁見の儀式は、枢機卿、諸外国の大使、法皇庁諸官員、聖職者、ローマ市官員等が一行に扈従し、一向は馬にまたがりその中をしづしづと進み、大司教ら、ローマ貴紳らが同じく馬でつきそった。行列の壮観はローマでも未曾有のものであった。祝砲がとどろき、人々の歓呼は耳をろうさんばかりであった。

この様な天国と地獄を同時にみ、経験した一行であったが、彼等の旅行中一五八七（天正一五）年六月一九日、秀吉によって伴天連追放令が出され、帰国后の少年使節の運命は秀吉謁見の后苛烈なキリスト教伝道のための命を賭してのたたかいとなった。その間彼等はパードレに叙品されたが、四人のうち一人は潜行布教中長崎に病死。一人はマカオに渡りその地で客死。一人は捕われて長崎で逆さ穴吊しに刑され（このとき彼は自分はローマにいった少年使節団の一人だと言った、という）、一人はイエズス会を脱会棄教して不慮の事件で重傷を負わされ死去した。こうして一六三二年までに四人共が昇天した。人物海の日本史（4）、天下人と南蛮船、「天正少年遣欧使節」、海老沢有道、毎日新聞社刊、昭和五四年。

幕府衰亡論、福地源一郎著、石塚裕道校注、東洋文庫84、平凡社、昭和四二年刊。

（2）スームビング号日本寄贈についてオランダ側は海軍のことを我国に種々伝授した。その項目としてまとまったものは航海術、運用術、造船学、砲術、船具学、測量学、算術、機関学、砲術調練等。これらが伝習所で教えられた。日本人学生はこれらを蘭語を学びつつの受講であったので、その苦労はまさに四苦八苦の体であった、という。オランダ側教官その他は総員二二名。給料は総員で四万両であった。同艦は日本で観光艦と命名された。長さ二九間（五二・七三米）、幅五間（九・一米）、深さ四間（七・二七米）、備砲六門、蒸気外車（ぺどるうま）で一五〇馬力、三檣一煙突のコルベットであった。幕府の答礼は、鎧一領、腹巻一領、金作太刀一振、金作長刀一振、金屏風、肥前焼大皿、蒔絵箪笥、大和錦、色縮緬等で、これらはオランダ国王宛であった。幕末の海軍物語、中島武、三友社、昭和一三年刊。

（3）慶喜は時に将軍、奉行であった勝海舟に第二次長州征伐の停戦役を命じ、このとき慶喜は勝を呼び出している。しかしこれは松平慶永からのすすめで、慶喜はしぶしぶこれに応じたのであった。しかし勝海舟が任務に出発したあと幕府は別途に朝廷から長州に停戦命令を出させて、勝海舟の役目は結局宙に浮いた。慶喜は、幕臣であり乍ら倒幕に近い発言をし、幕府の権威をないがしろにする海軍操練所を営んでいた勝海舟を快くは思っていなかった。「勝海舟」船戸安之、成美堂、一九九一年一月、第二八刷。「勝海舟」勝部真長、上下、ＰＨＰ、一九九二年。「勝海舟」松浦玲、中公新書、昭和四九年一四版。「勝海舟」旺文社編、一九八三年。

（4）慶喜の將軍職返上は、種々の事情、内外情勢交錯の中に於ても大英断であったことは間違いない。慶喜が「この英断を行ない玉うについては、閣老・参政、その他文武の幕臣等を論され、なかんずく会・桑二藩の武士等をしてこれに服従せしめたること、将軍家の苦心思うべきなり。」（幕府衰亡論、前出、二三六頁）、というのはさもありなんと同情出来る。朝廷の方もこの事を予期するものはこのときなかったのであるから慶喜の大英断は大英断として認められる。澁澤栄一は対外関係、財政、国家統一思想の発達等の条件から大政奉還を論じているが、その大英断なる所以をもし慶喜が自ら激発して再擧の師を指麾しようとなら、譜代の諸藩、奥羽の連合軍等これに直ちに馳せ参じ、幕府の海軍を以て関西を攻畧し、例え薩長をして九州、四国、中国を制圧されようともその戦争は少くとも数年の長きにわたったであろう、と論じている。その間に諸外国の日本をうかがいこれに干渉する事態を引起こさば、結果は俄に肘度するを許さざる大災厄を日本国家に及ぼすこともなったであろうと、慶喜が徳川の社稷を重んぜず、日本の運命を第一義に考えたと主張して「嗚呼最も善く前古無比の隆治を致して、封建政治の効果を収めたるは江戸幕府なるが、其末路の最も善く国家に尽せるも亦江戸幕府なり、今政権奉還を叙するに当りて此に言及せざることを得ず、と論じている。徳川慶喜公伝、四巻、前出東洋文庫、七八―八三頁。

両者旧幕臣であるからその言説はそれに副ったものであるが、慶喜と徳川幕府を討滅しようとするものにとっては、何の言説も馬耳東風であるからこの言をなすものは幕臣にしくはない。これらは当然主観的史観と考えられる。

討滅派にとってはこの大政奉還はもってのほかの儀で、彼等の劃策は、大政奉還当日に討幕の密勅が出ているという次第となった。その点については、タッチの差の競争で、古へのバイキングの英国上陸競争を髣髴させる。「徳川慶喜公伝、全四巻」前出。「昔夢会筆記」澁澤栄一編。大久保利謙校訂、東洋文庫、昭和四四年。「京都守護職始末、二巻」山川浩著、遠山茂樹校注、金子光晴訳、東洋文庫、昭和四一、四二年。

（5）　関ヶ原復讐戦＝薩長両藩連合と徳川氏

明治維新は、薩長対徳川氏の私闘であった。しかし私闘というのは、意味いま一つ不分明である。公闘という言葉があるのか、むつかしい。昔は正戦論というのがあって、正義の戦いは寧ろ世の浄化の為に必要であり、大いに正義の戦い、破邪顕正の刃は用いられなければならない、とされた。しかしその実態は、一切の戦争をこれに名分を求めるということになってしまった。故にどの戦争でも双方が正戦論を展開して正論の根拠が無くなった。侵略戦争でも正戦であった。日本の朝韓中侵略も暴支応懲、被抑圧民開放ということで当時の日本人はみなこれを信じていた。しかしここでいう私闘というのは私怨の争いという意味で、これを私闘とするとまさに明治維新は薩長の徳川氏に対する私怨をはらす為のまがうかたなき争い、私闘であった。つまり私闘というのはそういう意味である。薩長共にこの私怨のもとは関ヶ原の戦いに於ける敗戦のそれであった。一六〇〇（慶長五）年九月一五日、日本人なら誰もが何らかのかたちで知っている関ヶ原の戦いが、東西両軍（徳川家康方対石田三成方）の間で戦はれたが、薩長共にこのとき石田三成、安国寺恵瓊、上杉景勝、大谷吉継、小西行長等の属する西軍の一員となっていた。戦いは、午后になって西軍の敗勢から、西軍諸将の東軍への内応、寝返りが相つぎ結局西軍総崩れとなってアッという間に勝敗がきまってしまった。西軍の総敗北である。このとき薩摩の島津義弘は、三千の兵と共にこの戦線を離脱して大阪まで一気にかけ抜け、そこから船で領国薩摩へ逃げ帰ったのであった。義弘はもともと家康と誼を通じていて（ここにも返り忠があった。）その西軍所属は、石田方に妻子を人質にとられ、大阪で周囲すべてが西軍となり、ときに手勢二百名では如何ともしがたき結果であった。三千の兵は国許からのそれが関ヶ原で合流したものであった。その為関ヶ原の戦線では一発の銃弾もうたず、この撤退となっ

た。しかし撤収に当っては、乱軍の中方々で戦闘となり、甥の島津豊久が殿軍として奮戦、戦死している。人質は大阪で無事救出して帰国した。こういった状況であったので、結局最后家康に本領安堵されるが、戦后は立花宗茂、鍋島勝茂、黒田如水、加藤清正らの島津攻めの包囲にあい、これが冬にいたって解除されたが、后、島津は徳川氏代々に仇敵と目され、その厳重な監視の下に置かれたのであった。晦渋なサツマナマリはスパイをさける為と言われる。薩摩藩の徳川氏に対する怨はかくの如くであった。

もっと酷なのは長州毛利氏であった。元就の孫輝元は、このとき西軍の総大将に推された。秀吉の五大老の一人であったからである。これに吉川広家（吉川元春の息）は反対したが輝元は周囲の情勢からこれを受諾、大阪へ出向した。しかし関ヶ原へは赴かず、戦線には養子の秀元が数千の兵を引具し、吉川広家と共に参陣した。しかし毛利の兵は戦闘開始となっても動かなかった。ここでもまた家康の謀略があり、吉川広家がこれに応じていたのであった。秀元はこのときまでその事実を知らなかったらしいが、広家に説得されて非戦の原則に従ったという。彼等はこの后直ちに関ヶ原を撤収して大阪城に入ったが、ここで家康の裏切りにあう。即ち大阪城に立籠らず、開城すれば本領を安堵するというのである。こうして彼等は大阪城を出て領国にかえった。しかし家康の食言があり、毛利家はこのとき元就の築いた大領国を殆んど徳川氏に奪はれてしまう。即ち備後、備中、安芸、因幡、伯耆、出雲、隠岐、石見、周防、長門の一〇ヶ国のうち毛利に残されたのはわずかアトの二国だけ、八ヶ国はむざんにも召上げられたのであった。一二〇万五千石の禄高が三六万九千石となってしまったのであった。広家は徳川氏に対し家康の言を背景としてこのことなき様渾身の奔走を行ったが空しかった。あはれは正にきはまった。しかし徳川氏にしろ誰にしろ日本新政権となってその中にこの毛利の如き大領国を一大名としてかかえられるかどうかは三才の童児といえどもその不可能は火をみるより明なことであった。家康にとっては五大老の一人である輝元が敵に廻ってくれて結果論にすぎないとしても大きなさいわいであった。ここで假説であるが、毛利が東軍にくみしていたら大変興味ある関ヶ原戦后となっていたであろうと推察出来る。以后徳川氏が同盟国毛利という大勢力をどの様に扱い、その力をそぐにどの様に腐心したであろうかということである。

しかし毛利自身にしてみたら完全に家康と徳川氏に裏切られたという思いであることは間違いない。そこで次の様なことが起った。即ち毛利家正月暁暗の行事というものである。正月の暁、毛利家では家老がアタフタと領主の寝所にかけこむ。そして主君に内外の情勢をとき、今やここに父祖のうらみを徳川氏にむくいんという。声涙共にくだる激白である。しかしこれを聞き乍ら寝所に端座していた領主は、やおら涙をはらい、気持ちは変らぬ、しかし未だ機は熟しない、といってこの蹶起の動議をしりぞけるのである。アトは主従手をとりあって亡国のうらみに真底悲嘆する。毛利氏ではこれを何十年いや関ヶ原以来二六〇年間アク事なくつづけてきた。恨みは骨髄に徹している。遺恨百年一剣をみがいてきた。

こうして薩摩、長州二藩は明治維新ではれて徳川氏に私怨のたたかいを挑み、みごとこれを軍門に下して父祖の仇を報じるのであった。明治維新を薩長の私闘と呼ぶ所以である。

孝明天皇の維新クーデター

しかしことはこれだけでおさまらない。明治維新を単なる薩長の対徳川私闘に終わらせない何かがあった。これに大義を冠し、日本未曾有の正戦とした行動があった。それこそは孝明天皇のクーデターであった。時期的にはこの方が早い。明治維新のイニシャチブは孝明天皇がとった。明治維新への変革のすべては孝明天皇の指導にまつものであった。これ無くして明治維新の統一戦線はあり得なかった。実に孝明天皇こそは日本有数の政略家であり、卓抜の見識と技倆をそなえた天皇であった。日本に天皇の内乱、クーデターの試みはそのときどきにあった。これは前稿にすこしくふれた。その中でこうした試みが成功したのは天智天皇（仲大兄皇子）の蘇我氏誅略による大化改新とこの孝明天皇による徳川氏覆滅の明治維新の二回のみであった。孝明天皇の事蹟と英明に我々はもっと眼を向けねばならない。天皇は、ペリー提督来航の七年前に早くも日本辺海騒擾に対して幕府に海防の必要を厳達された。そしてこれに対して幕府は善後策を

奉答した。これ実に朝廷の幕府関與の嚆矢であった。関ヶ原以来二五〇年間、絶えてこの様なことはなかった。天皇と朝廷は徳川氏によって完璧に政治上空白の地位に置かれてきた。種々の接触は勿論あったとしても、こと政治政策に関し天皇と朝廷の出る幕はただの一片もなかった。それがここへきて幕府は朝廷の意を迎えておのれの意向を正し、その政策を遂行しようとするのである。これは孝明天皇が仁孝天皇の崩御と共にこの擧に出られたのであった。そして一八四七年九月二三日即位と共に尚幕府に対する意向を強められ、一八五〇年四月には七社七寺に国家安泰と宝祚無窮を祈願されこれはその后屢々行はれて、一八五三年一一月二三日には、ペリー提督の来航と共に熱田神宮、香取、鹿島両社をはじめとする一九社に国難に対する神明の冥助を祈願されて幕府へのいましめとされた。これは一八六三年三月の加茂大社への行事となり、四月には石清水八幡宮神前に於て家茂と後見慶喜に攘夷の節刀を賜うというところまで昇華するのである。ここまでくると幕府の立場は、朝廷あっての存在となった事は明らかであった。節刀云々の儀は、家茂、慶喜共に不参で成就しなかったが、このとき攘夷実行期限が定められ、それは同年一八六三（文久三）年五月一〇日となった。あれをみ、これをはかるうち、幕府はぬきさしならぬ土壇場に追いつめられたのである。しかしそれ以前、はしなくも幕末政治、朝幕関係変換の大原因を構成する一擧が発生した。これ一発で幕府は実質上頓死した。これぞ幕府政治行為に対する天皇の裁可権の設定、所謂「勅許」の下賜條款である。即ち幕府の行為は天皇の裁可、いはば批准を経ずしては効力を発生しないという條款である。しかもこれには何の文書も法律文言もない。ただ勅許あらねばならぬということで、これが盤石の重しとなって幕府を圧したのである。関ヶ原以来二百数十年、ただ一片のかかる文章、実行のあったためしはない。それがここへきて孝明天皇の一連の幕府制肘の総仕上げとしてこれがここにあらはれた。孝明天皇のクーデターによって徳川斎昭以下勤王諸家諸卿、勤王の志士・浪人は京都勧説、京都聚集を果たし、俄然京洛三六峰と加茂川の聖域は、あたかもベルリンに於ける、ローマに於けるナチスファッショと共産党の日夜の血闘の如く、勤王佐幕の激闘の地と変じた。これらはみな一八四六（弘化三）年以来の一連の孝明天皇による武器なきクーデターにつられて起ってきたものであった。他はない。幕府はこの勅許の重大さ、幕府滅亡の梃を構成するこの一擧の意味を真に

解さず、予見・洞見を欠いてその自滅の道をすすむ。やんぬるかな。この間、幕府は勅許の得難いことを理由に対外條約実行の延期をはかるを常としたのである。例えばハリスの通商條約締結要求を右を以て口実として一年間も放置する等あり、このとききめられた大阪江戸の開市（一八六二、三年）、兵庫、新潟の開港を矢張り同様口実で五年間も延期（このため幕府は一八六一（文久元）年一〇月、英国、フランスに使節を送って延期を要請した。この開市開港は孝明天皇の代に成就せず明治天皇に引つがれる）したのである。幕府亡ぶべくして亡びた跡はフランス帝制、清朝、ロマノフ家滅亡転覆の跡にも比すべきか。即ちこのとき幕府は日米和親條約（神奈川條約と英露條約）締結を朝廷に事情説明するところあったが通商條約締結につきこれをまた説明してその勅許を奏請した。このときいかでかこの擧の幕府に於て行はれたかは全く理解の外である。毛を吹いて疵を求めるの類か。そして一八五八（安政五）年二月この為老中堀田正睦入京して陳情に及んだ。しかし結果は三月勅許不下となった。（幕府は朝廷を軽んじ、かかることでも幕府より水を向ければ朝廷、唯唯としてこれ従う、と誤解したのであった。孝明天皇のクーデターなど思いもしなかったのではないか）。愕然とした堀田は四月まで、勅許降下に奔走したが、空しく、江戸にかえった。ここを以て朝幕ところをかえて幕府の上に朝廷あり、朝廷の下に幕府ありの国体炳乎として分明となったのである。そして追討ちをかける様に一八六三（文久三）年三月、孝明天皇より家茂に政務幕府へ御委任の勅許が行はれ、家茂は入京してこれを拝受した。あぁ、関ヶ原に天下のことを定めた家康これを何とみるか、時勢進運の如何ともし難しと嘆ずるのみであろうか。ここに幕府の衰退は眼をおおうが如く、明治維新の成就へ道は一すじとなった（孝明天皇に幕府覆滅の意思はなかったのではないか。或いはしからん。それはこの一事と皇妹降下で一応考えられる。しかし天皇がここまで朝権を上に出せば、アトは歴史の示すとおりの道すじとなる事は火をみるより明らかであった）。これ一八四六年以来の孝明天皇武器無きクーデターの帰結であった。具体的には安政大獄を経て、このことある二年前の一八六一（文久元）年八月皇妹和宮の家茂への降嫁勅許によってこれと共に孝明天皇は完全に対幕政治の主導権をにぎったのであった。「一外交官の見た明治維新上・下」アーネスト・サトウ、坂田清一訳、岩波文庫、一九九七。「ヒュースケン日本日記」青木枝朗訳、岩波文庫、一九九七。

「ハリス日本滞在記三冊」岩波文庫、一九九七。「大君の都」オールコック、三冊、山口光朔訳、一九九七年。「幕末維新懐古談」高村光雲、岩波文庫、一九九六年。「幕末百話」篠田鉱造、岩波文庫、一九九七。

尚孝明天皇暗殺説という諸説があって相当根強い。これにつき著者ははるか以前、天皇が厠で暗殺されたというのを読んだ記憶がある。題名も著者も忘却している。しかしこれだけの政敵を作った天皇であるから、あはやとも思う。しかしそれを主張するだけの資料や確証はないらしい。後教にまたねばならない。「明治維新の謎」郡順史、「史」九六号、一九九八年。

彦根市の湖側に資料館があって井伊直弼関係のものも色々あったが、その中に直弼が手作りの粘土細工があった。勿論大老になる前の埋れ木の舎時代かそれ以前のものかと思はれるが、大へん小さいのがかなりあって一寸奇異であった。指先でもち上げる様に小さい。それと桜田門外の変のとき彦根藩士はすべて刀の柄に袋をかぶせていたといいその実物が、数個展示されていた。皮製の様で細い固い紐がついており、それで袋は鍔をおおって鞘の上部か下げ緒のところでくくりつけられていた。これは雨雪のとき柄の絲が痛まない為であったという（その日は雪がふって上がっていた）。水戸藩浪士（一七人）、薩摩藩士（一人）に大老が襲はれたとき、従って彦根藩士の刀は突嗟に抜刀出来なかった。鞘のまま腰からぬいて危急に斬り結んだ藩士も一、二にとどまらなかったらしい。こうして彦根藩士は浪士に瞬時にきりたてられ、むざむざ大老の首級をその手にまかしたのであった。あのタイニイ・ミニアチュアの粘土細工と柄をおおう袋の話は何か関係があるのであろうか。

（6）　慶喜が平凡な人格であったが徒に策を好む人物でもあった事は色々言はれている。（船戸安之、前掲書一五〇頁）。また慶喜が一八六四（元治元）年春に長州藩主毛利敬親（タカチカ）と書簡を交換しているという。七月に蛤御門の変で長州が京都から追放される前夜の行為で慶喜としては軽率なそれであったとされる。しかも后にこのことを慶喜はごまかして書簡のことをあきらかにしない、ともされる。このことについては、徳川慶喜公伝（前出澁澤栄一著、東洋文庫、平凡社）の中にも記述がなく、また「昔夢会筆記」（東洋文庫76）ではこのことにつき慶喜にたずねたが慶喜は、そんなことはある

べきものではない、とその問を一蹴している、という。しかし大変疑はしい、とされるのである（徳川慶喜、別冊歴史読本、一九九七年三一号、「慶喜対長州藩」一坂太郎、一〇六―七頁）。何れにしても慶喜の二六五年の徳川氏社稷をになって天下に号令する大丈夫というプロフィールはどうも出てこない様である。勝海舟は氷川清話（勝海舟全集 21、講談社、昭和四十八年）で朝韓中日のいろいろな人物評をやっている。慶喜、家茂についての論評はしかし、ない如くである。自ら主君として仕えた人には敬意と尊敬を払っているのであろう。尚水戸の天狗党が破れて敦賀に押しこめられたとき彼等の身柄を慶喜はアッサリと追討軍に渡してその手で処刑させてしまった。天狗党が押しこめられたのは敦賀の海辺のにしん小屋で、隊士はギュウギュウ詰めにされて、土地の人の話によるとにしんの匂いがたちこめてタマッタものではなかったろう、という事であった。その側にもり土をした大きな碑がたてられていた。敦賀の山手の寺院に天狗党が供養され今日迄遺族が参拝するという。天狗党は諸派があったが、主隊は武田耕雲斎ひきいる八一八名で、那珂湊（水戸）から敦賀まで下野、上野、信濃、飛騨、越前新保を経て西上した。ここで降伏するが、それはこの西上が京都にいた慶喜をたよっての事であったのがその旧主の慶喜が朝廷に天狗党追討を奏請して自らその大将の責に任じた為であった。朝廷では慶喜の意図をスンナリとは理解出来なかった、という。降伏后天狗党は最后幕府に引渡され「賊徒」として処断される。朝廷は彼等を「浮浪」と呼んでいた。尊攘決起の彼等を賊徒とは呼び得なかった為とされた。その断罪は、斬三五三、遠島一三七、不構追放一八七、水戸渡し一三〇、永厳寺予り一五才以下の隊士一一であった。にしん小屋は一六あり、五〇名づつが収容された。現在はその一つが残っている。水戸常磐神社義烈館記録。「天狗党の跡を行く」鈴木茂乃夫、暁印書館、平成六年。ちなみに義烈館にある斎昭の遺品等からするとこの人、種々の豪拓の書、すぐれた容貌写真等の他に、自ら彫刻した美麗な能面、面、刀剣（自らの鋳造にかかる、二振）等があり、剛毅、直情にして、しかもセンス豊かなすぐれた資質、人格の持主であったことがこれらを通じわかる（これら遺品は真物としなければならないであろう）。彼は大船も建造したというが、「太極」と銘した臼砲（口径三六糎、口辺の厚さ九糎、砲身一二七糎、ケヤキ材の車四つがついていた）のズングリムックリしたのを七五門鋳造し、七四門を弾薬をそえて幕府に献

上した、という。その砲に「太極」と直筆の銘が打ってあった。時代が感じられる銘であった。これは常盤神社の庭前にすえられていた。

最大汚点は慶喜が自ら準備したか、徳川藩士の暴発をおさえきれなかったのか、彼が鳥羽伏見の戦いで朝廷に対薩の表を奉りこれに自らが責任をとる形で戦争をはじめたことである。これについては次の如く考えられる。

① 西郷隆盛の企図した徳川氏武力討伐の江戸、関東各地騒乱、薩朝海戦の意義と謀略を察知しなかった。薩摩屋敷焼き討ち、関東平定（「相楽総三とその同志たち」、長谷川伸、新外説社、昭和一八年）海戦勝利で舞い上がり、長州征伐大敗の意味を没却した。

② 戦いを開始するに当り、情報網を全くもたなかった。忍者集団やスパイ集団を養はなかった。

③ 薩長連合の意義とみとおしを欠いた。

④ 時勢の進運に対する予見・洞見をもたず大政を奉還しながら自らの辞官、納地の否認にこだわった。

⑤ 兵員、軍備のそなえに吝であった。

こうした慶喜であるけれど、これを誹謗論難する人はみあたらない。それは次の理由によるだろう。

① 明治天皇が罪を許され公爵に列せられた。

② 大政を奉還した。

③ 徳川三百年の租法を守る大樹公であり、判官贔屓の格好の対象となった。

④ 朝韓中を対象に明治日本が明けくれた侵畧戦争の規模と比較すれば慶喜のおかした戦いは小さなものであった。後には人々は戦争といえば朝韓中に転戦する日清、日露戦争の様なものと認識していた。

(7) 「幕末遣外使節物語」、尾佐竹猛、講談社学術文庫、一九八九年。「勝海舟」、旺文社、一九八三年、八五―八六頁。

(8) (イ)「日蘭交流のかけ橋」、神戸市立博物館、一九九八年一月。(ロ)「江戸さいえんす図鑑」、株式会社インテグラ、中矢憲子発行、平成六年。(ハ)「阿蘭陀趣味」、たばこと塩の博物館、一九九六年一〇月。(ニ)「古地図セレクション」、神

戸市立博物館、一九九四年一二月。（ホ）「海のシルク・ロード」神戸市立博物館、昭和五七年。

（9）「一八〇〇年前后の日蘭交渉ー本木蘭文を中心に」鳥井裕美子、「阿蘭陀通詞本木良永・正栄の足跡を追って」勝盛典子、「阿蘭陀通詞と本木家について」原田博二、以上何れも（イ）所収、一五四―一七〇頁。

（10）「江戸時代のからくり」半田昌之、（ハ）所収、三一―三四、一五六頁。

（11）「からくりと江戸の科学技術」鈴木一義、（ロ）所収、七二―八九頁。

（12）註（9）参照。ヅーフ・ハルマ、三千ページ、語数九万余、五八巻。もとは和蘭甲比丹。ヘンデレキ・ヅーフ（Hendrik Doeff）が蘭人フランソワ・ハルマ（Franyois Halma）の蘭仏辞書から作製計画、通詞一一名が一八一一（文化八）年から一八三三（天保四）年まで二三年かかって完成した。着手から完成まで生存したのは一人のみで一〇人は半途に他界し、あとを夫々後輩がついで完訳にこぎつけたという大業であった。幕府はこの辞書を三部のみ作製し、一八四九（嘉永二）年まで公刊を許さなかった。この為その間これはさかんに写本が行はれた。適塾（緒方洪庵）でも写本が一部あり、塾生は毎よっぴてこれを引っ張りあって代る代るに利用した、という。「勝海舟」勝部真長、一九九二年、上巻三六八―七〇頁。

（13）「銭五一件」、能坂利雄、歴史読本、昭和四六年。「銭屋五兵衛」、若林喜三郎、「鎖国と海商」、毎日新聞社、昭和五四年。銭五と同じ様な運命に落入ったものに高田屋嘉兵衛一族がいる。両者同年代だが、高田屋の方がすこし早い。高田屋は若年のみぎり借金して船を作り、沿岸貿易に従事したが、そのうち一五艘の船を有するまでになった（一八〇五（文化二）年）。そして爾来蝦夷地を中心に沿岸貿易を営んだ。彼はエトロフ島への航路を開いた事、ロシアに捕虜となったが、この時起った争いに日露間を周旋してその危機を救ったことで有名である。自身は政商として活躍し、天寿を全うしたが、その死后一族は密貿易を口実として持船をすべて没収され、また末子が二代目高田屋嘉兵衛を名乗ったが残っていた家屋敷も手放す破目に追こまれて没落した。高田屋嘉兵衛は豪膽、仁愛に富み、よく人をいれ得る性格であった。ときに北辺は騒がしく前述のレザノフが屢々松前、クナシリ、エトロフを犯した。このとき幕府は松前を直轄地とし（後に松

前藩に返却）佐竹、庄内、津軽、南部の兵を夫々に配置したが、その兵の輸送指揮に嘉兵衛は持船をもって当った。幕府との結びつきは有名な探検家で幕府のご家人であった近藤重蔵守重（ときに勘定奉行方役人）と蝦夷地で出会った事が契機となった。間宮林蔵も嘉兵衛の船でカラフト探検を行っている。レザノフは露海軍大尉ホーストフなる者を使って北辺を侵掠したが、幕府の藩兵は戦意を全く持たなかった様で、再三敗北し、時には戦はずして他の非戦場所へ移動した（敵前逃亡か）。そして一八一一（文化八）年七月、露艦デアーナ号が測量の目的でクナシリ島にやってきたときその艦長のゴローニンを松前奉行が不意をとらえて捕虜とした。露艦は副長が指揮してオホーツク海へ脱出した。そしてこの艦が一八一二年九月シベツ漁場でこの事件と直接関係のない高田屋嘉兵衛をとらえた。こうしてゴローニン、高田屋嘉兵衛の交換交渉がつづくこととなった。ロシアはときにフランス・ナポレオン一世と結んだチルヂット条約が破れ、この年六月にナポレオン軍六〇万のモスコウ進撃を迎える建国以来最大の危機に立っていた。これロシア側が日露関係を平和裡に推移させたい原因であった。嘉兵衛は翌年四月までカムチャッカにとどめられた後釈放され、一〇月にはゴローニンも無事釈放されてこの一件は落着した。幽囚の間高田屋嘉兵衛の態度は堂々としていて立派に問題解決に努力したとロシア側はこのことを記録に残している。また嘉兵衛に四人の人質がつけられることとなったが、嘉兵衛は一人でゆくと言い張った。このとき船子の人質志願が嘉兵衛の徳をしたい十数人に上った。彼は結局その中から四人を選んで同道した。しかし四人のうち二人が極北の荒天と風雪に悩まされて死亡した。嘉兵衛は帰国に当りこの二人の墓をたててから虜囚の地を離れた、という。明治一三年、天皇は嘉兵衛の功績を嘉みし、金二五円をその孫の鶴喜代に與へた。明治一三年七月二一日、三條太政大臣。尚明治四〇年八月、嘉兵衛に正五位が追贈された。「高田屋嘉兵衛」、村上元三、鎖国と海商（前掲書）。「高田屋嘉兵衛翁略伝」、都志町保勝会発行、昭和六年。「ガローウニン日本幽囚實記」、集芳閣、大正一五年。

オランダ商館は平戸にあったとき、一六二八年から一六三三年一月まで約五年間幕命で閉鎖されたことがあった。これはときの政商で長崎代官の地位まで手に入れた末次平蔵政直が台湾に蟠居したオランダ商人と事をかまえてオランダ台湾長官ピーテル・ノイツ（Nuijts,Pieter）と紛争を起した騒擾の挙句に行はれた処置であった。所謂末次船二艘が台湾でオランダ側に抑

留され、商品、武器弾薬からすべて没収され、その出航まで禁止されたので日本側は談判に事よせてノイツを襲いこれを捕虜として、結果人質（ノイツの長男ラウレンス（Laurens）以下五名、ラウレンスは長崎で客死）をつれて日本に帰ったため幕府は一旦平蔵政直の訴えを聞いてオランダ商館閉鎖の手段に出た為であった。

後、オランダ側は帰国していたピーテル・ノイツを日本に釈明の為護送してきたので幕府はこれを諒としてオランダ商館の再開を許した。しかし実際は幕府も日蘭貿易の再開を望んでいたのであった。末次一家は銭五、高田屋嘉兵衛一家と同様、平蔵政直は暗殺（乱心として監禁の上毒をもられたという）され、三代平蔵茂朝のときカンボジア密貿易を口実に一族老幼男女悉く罪を與へられて滅んだ。（平戸オランダ商館の日記、第一、二輯、永積洋子訳、岩波書店、昭和四四年。）

附記

本稿執筆に際し、明治大学、国際日本文化研究センター、近畿大学、神戸市外国語大学（順不同）より貴重な文献の借覧を許された。誌して厚く感謝の意を表したい。